
天国のマセル

仲至

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天国のマセル

【Nコード】

N2642T

【作者名】

仲至

【あらすじ】

クル教は排他的一神教でありながら分厚い経典はおろか禁忌や戒律すら皆無で、凡そ素朴でおおらかな信仰を守ってきた。それは唯一の拠所であるクル神の「十言」そのものがあまりに漠然としているからかもしれない。

……とにかく完結を目指して頑張ります。

マセルの衝動 1

マセルは子供の時分に一度だけクル神の像を思い切り蹴ったことがある。

そのころマセルたちは「決闘ごっこ」に熱中していた。決闘といっても素手で行ういわゆる武闘試合のようなことで、所詮子供の遊びなのだが単なるじゃれ合いとも言えない。どちらかが「まいった」と言うまで続ける。

マセルは強かった。マセルはこの時8歳だったが会衆の中でこの遊びに加わっている9歳や10歳の子もマセルに敵わなかった。

決闘ごっこをしている子供たちはすり傷やあざが絶えなかったが大人たちは凡そ大らかに見守っていた。打ってはいけない部位を教えたり、檄を飛ばしたりした。自分たちも年頃の時分は同じようだった。決闘ごっこは、会衆の男たちにとっては懐かしい通過儀礼のうなものであった。

「マセルは他の子と違って本当に真剣だ、だからみんな敵わない」
「まるで負ければ命がないかのようだ」

会衆の者たちはマセルの闘いぶりをそう評した。もとよりマセルたちの年齢では力や技量に大きな差はない。マセルは少し純粹すぎるどころがあつて、遊びだというのに決闘という言葉の響きを文字通りに捉えすぎていたのかもしれない。常にがむしゃらに向かつていくし、絶対に「まいった」と言わない。それで他の子供たちは次第にマセルの相手をしなくなった。

だが、同年のリギルだけが諦め切れずにまだマセルに挑んでいた。ふだんは一番仲が良いのに、決闘の時ばかりはリギルは対抗心をむき出しにしていた。もちろんマセルも一切手加減せず立ち合った。リギルは今日もまた地べたに押さえつけられたまま「まいった」と言ってしまった。

地面に座ったままのリギルを立ち上がらせようとマセルが手を伸ばしたがリギルはそれを掴まずじっと俯いていた。

「リギル、もう帰ろう？」

マセルは少し困惑して促した。しかしリギルは動こうとせず

「いいよ、先に帰れば」

と鋭く言った。今までリギルはこんな態度を取ったことがないのでマセルは泣きたいような気分になった。ふたりともじっと動けず黙っていた。

リギルは自分がただどうしてもマセルに勝てないことで意固地になっているだけだということはすぐ自覚した。しかし一度こんな口をきいてしまった手前、引込みがつかなくなってしまった。

「帰れば？」

もう一度リギルが言った。リギルは少し前から自分の父親に手ほどきを受けていた。どうしてもマセルに勝ちたいと、父親に授けられた手順を何度も練習し、今日こそはという気合で臨んだのである。しかしマセルには通用しなかった。リギルは自分の父親の面目まで傷つけられたかのように感じてついみっともない態度を取ってしまった。

「どうして？」

マセルはもつと泣きそうになったので短く聞いた。

「マセルは強すぎるから。もう決闘はやらない」

「じゃあ……じゃあぼくだれと遊べばいいの？」

マセルはもう泣いていた。

「知らない、そんなこと……もうだれもマセルとはやらないよ」

リギルは自分の父親のことを思いながら言った。父親が言っていた「負けて潔くなければ、決闘をする資格はない」という教えにも背いてしまったと気が付いて絶望的な気分になった。同時に、マセル

に父親がいないことを思い出した。マセルが幼い時からいつも「お父さんはクルといっしょにいる」と言っていることを思い出して。それでついこう口走ってしまった。

「クルと遊べば？ マセル強いからクルじゃないと勝てないよ」

マセルの表情が変わった。涙が急に引いて、代わりに、だれにというのではない憎しみのような感情が身体じゅうを締め付けるように感じた。両手の拳がきつく握りしめられていた。リギルは急にマセルの表情が変わったので驚いた。一瞬見たマセルの眼が自分を見下しているように見えて怖くなった。マセルがいきなり走り出したのでリギルはその後ろから叫びながら立ち上がった。

「マセル！ごめん！マセル！」

マセルの様子を見て、リギルは焦った。整理はついていないが、とにかく自分が何かとんでもないことを言って、このままでは取り返しのないことになるという恐怖が全身を襲った。リギルも後を追って走り出した。

リギルが見ると、マセルの右足がちょうどクル像の左腿の辺りを何度も蹴りつけているのが見えた。リギルは夢中でマセルにしがみついた。

「マセル！ごめんマセル！」

リギルはマセルにしがみついたまま何度も繰り返した。マセルは何も答えないまま蹴りつづけていたが、そのうちにまたマセルは涙があふれてきて、クルを蹴るのをやめると一度リギルの顔を見たが、そのまままたどこかへ走って行った。リギルは少しの間呆然とクル

像の前にへたり込んでいた。リギルも泣いていた。泣いたまま立ち上がってとぼとぼと歩いた。

リギルはマセルを探し回って外をとぼとぼと歩いた。探してどうするのかも考えず心の整理もつかないままとにかく探し回った。辺りが薄暗くなり脚に疲れを覚えた。そしてやみくもに歩き回っているうちに家に辿りついてしまった。家の前の石段に立ち尽くしているリギルに母親が気が付いて

「リギル、どうしたんか？」

と言うとリギルは抱きついて大声をあげて泣いた。

3

マセルはいったん当てもなく出て行ったが結局クル像のある会所に戻って来ていた。家に帰りたくなかったので、だれもいなくなつた会所で椅子に腰かけてしょんぼりしていた。

「あれ？ マセル何やってんだ。もう暗くなるぞ」

夜の集まりの準備に来たクセルがじっと座っているマセルを見つけ、声をかけた。クセルは会衆の中ではもう一人前の青年だったが子供たちからは年の離れた兄のように慕われていた。いつも気安く話しかけてくるマセルが何も答えないのでクセルが見ると、マセルの顔には砂埃と涙の跡が残っていた。クセルは持っていた燭台をいったん講壇の脇に置くとマセルの隣に座った。

「どうした。けんかでもしたか？」

ううん、とマセルは黙つたまま首を横に振った。クセルはマセルが話し出すまで待っていた。

「ボク、クルに悪いことした」

「うん？ クルに？」

「……クルを蹴った」

クセルは事情がよく分からなかったが、話をよく聞いてやろうと思つて一度大きなため息をついた。

「どうしてマセルがクルを蹴るんだ？」

「……」

「間違えて当たっちゃったのか？」

マセルはまた黙ったまま首を横に振った。クセルはまたマセルが話し出すのを待った。

「もう遊ばないって……だれも遊んでくれないから……」

マセルは思い付くままに話したがクセルにはさっぱり分からなかった。

「とにかくもう遅い。もう家に帰ろう」

クセルはマセルを送って行こうと立ち上がったがマセルはじっと動かなかった。埒が明かないのでクセルは少し強く言った。

「マセル。もう夜の集会が始まるんだ。お母さんには俺がちゃんと行ってあげるから」

クセルは事情がよく分からなかったが、とにかくマセルがクル神の像に何か悪戯をしてしまって母親に怒られるのが恐いので帰れずにいると思った。クセルはマセルを抱っこして家まで連れて行った。そして、いずれにしろ子供の他愛ない悪ふざけだろうからあまり強く叱らないでくれと念を押してクセルは急いで会所に戻って行った。

しかしマセルが家に帰ろうとしなかったのは実は母親の叱責が恐かったからというよりも、自分のしでかした罪をリギルのせいにしたくないという意地のような感情があってクルを蹴った理由をどう話したらいいのか思いつかなかったからだった。

結局マセルは自分がクルを蹴ったということは素直に話したが、母

親が何度その理由を聞いても何も話さなかった。マセルがあまりに頑なだったので母親はマセルをこっぴどくぶった。しかし、それがクルに対する自分の謝罪のように感じたのでマセルはむしろ甘んじて罰を受けた。

リギルは母親に抱かれたままひとしきり泣いた。落ち着くと自分から母親に今日のマセルとのことを話そうとした。しかし、自分でもよく整理がついていなかったのうまく説明できなかった。

「じゃあ、リギルは、蹴れと言っていないのにマセルが自分でクル像を蹴ったのね？」

「うん。でもさ……」

「うん？」

「でもぼくがマセルを怒らせちゃったから、マセルは悲しくて、それでやったんだよ、マセルはお父さんがいないから」

「リギル、マセルにお父さんのことを言ったの？」

「ボク言わないよ！ でも、マセルはクルと遊べ、って言っちゃった」

「そう……でも、それでマセルがクルを蹴ったりするなんて、マセルいつもとっても優しい子なのに」

「だから！ ぼくが悪いんだよ。マセルは本当はぼくに怒ってるんだ。でもクルを蹴ったんだ。ぼくが弱いからだよ、だから」

リギルがまた泣きそうになったので、母親はリギルをもう一度強く抱きしめた。

「明日、マセルにちゃんとごめんねって言える？」

「うーん……ぼく言うけど、マセルは許してくれないよ」

「じゃあ、このままでいい？」

リギルは嫌だ、と首を横に振った。

「じゃあ、ちゃんとマセルに謝りなさい。マセルだってきつと悲しいよ。リギルともう遊べなくなったら」

リギルは少し考えてから、うん、と頷いた。

会所での集まりから父親が戻って来たとき、リギルはもう眠っていた。母親がマセルとのことを父親に話した。

「そうか、マセルのことはさっきクセルから聞いたんだが、ということはリギルがけしかけたようなもんだな」

「ええ。でもマセルが少し心配だわ。そんなことする子じゃないと思うんだけど」

「うん。ただマセルは少し思いつめるところがあるからな……明日マセルの家に謝りに行こう。リギルも連れて行くよ」

次の日、大人たちが会所に集まったときマセルの話になったが、大方は単なる子供の悪戯だから取るに足らない、というような見方になった。しかし、当のマセルとリギルは互いに意識しながらもそれぞれ他の子と話していた。そのうちに子供たちはみんな庭に出て行ったが、二人はそれぞれ会所の隅のほうにぼつん、ぼつんと座ったままだった。

リギルの父親がその様子を見てリギルに近づいて言った。

「リギル、マセルにはもう謝ったのか？」

「うん。ぼくごめんって言ったんだけど……」

リギルは会所に来たときマセルの顔を見つけるとすぐに謝るつもりで一度声をかけたのだが、マセルはじつとリギルの顔を見ただけで何も言わなかった。それから二人とも気まぎれになってしまい近付か

ないようにしていた。

「ちゃんと謝ったんならもういい。あとでマセルの家にいくぞ。マセルのお母さんも心配してるだろう？　ちゃんと言っとかないとな。お父さん用事が終わるまで、マセルといっしょに待っていなさい」

父親はリギルにそう言っておいた。会衆の日常的な運営は男たちがやっている。マセルは母親しかいないのでいつも一人で会所に来て遊んでいる。たいてい帰りはリギルといっしょだったが、今日は一人で先に帰ってしまうかもしれない。リギルは、声をかけないままじっとマセルの様子を見つめていた。

マセルは一人で隅のほうに座って俯いている、ひとりで何かぶつぶつ言いながら足を振っている。歌でも歌っているのだろう。リギルは、マセルがまだ帰るつもりがないようなので少し安心して、じっと見ていた。

しかし、不意にマセルが立って会所を出て行こうとしたようなので、リギルは慌ててマセルのところに走って行った。

「待って！　マセル」

マセルは黙ってリギルのほうを振り向いた。

「お父さんが、マセルの家に行くから待ってて……」

マセルはそれには答えず、まだ何かを口ずさみながら、さっきいた場所にまた座った。リギルは、口はきいてくれないけれども、とりあえず自分の言ったことがマセルに伝わったようなので少し嬉しくなった。リギルはわざと体が触れるほどマセルの近くに座った。マ

セルが何か言うかと期待したが、マセルはずっとそのままだった。
リギルの父親が戻ってくるまで、二人は黙ってそうしていた。

リギルの父親が戻ってくるのにそう時間はかからなかった。父親はマセルのほうに向かっていくと

「昨日のこと、お母さんに話したか？」

と聞いた。マセルは黙って頷いた。父親は特に何も聞かず

「じゃあ、帰ろうか」

と言うとゆっくり歩き始めた。マセルとリギルは、互いに口を利かず父親の後ろを少し離れてついて行った。

「やあ、いるかい？」

リギルの父親は、マセルの家に着くと声をかけた。少しすると母親が出てきた。

「あら！ 珍しいわね」

母親は明るく声をかけた。以前は互いによく行き来していたものだったが、マセルの父親が逝ってからは会衆の年祭で顔を合わせる程度で家に来ることもなくなった。母親はすぐに昨日の一件の話だど気が付いたが、それよりもリギルやその家族が久しぶりに訪ねてくれたことに少し心が浮き立っていた。

「リギル……さあ、とにかく中へ」

マセルたちの家は前と変わらず広くゆったりしていたが、物が少なく簡素な雰囲気になったな、と父親は思った。

マセルとリギルは、テーブルに向かい合って座った。父親は立ったまま部屋の中を眺めて回っていた。マセルの母親は用意した菓茶を4つテーブルに置くと、自分はマセルの横に座った。父親は座らずに窓際に立ったまま話し始めた。

「昨日のことだが、リギルが何かマセルに言ったのが原因らしいんだ。マセルから何か聞いてるか？」

「そうだったの？ でもマセルは何も言わないのよ」

「まあ、みんなは子供のしたことだし、特に騒ぎにするつもりはないようだから、いいんだが……とにかく、今回のことはリギルのせいなんだ。リギル、お前もちゃんと謝れ」

父親に促されてリギルは母親に向かってもう一度ごめんなさい、と謝った。少しマセルの顔を見たがマセルは目を合わせなかった。母親はその様子を見て言った。

「いいのよ。マセルだって本当はもう怒ってないわ。ね、マセル。いつまでも意地になってないで仲直りしたほうが良くない？」

しかしマセルは返事もせず目線を落としてじっとしているだけだった。

「まあ、特にどうということはないが、一応な……」

間を破って父親が言った。

リギルもマセルも詳しいいきさつを話さないので、大人たちも事情

のよく分からないまま、この件は特に騒ぎにもならなかった。ただ、リギルとマセルがいつしよに家路に着いたのはこの日が最後になった。二人の間には何か深い溝のようなものができてしまい、それは結局マセルが死ぬ間際まで埋まることはなかったのである。

クルの報い 1

マセルたちの会衆は家族や親類縁者を含めても百数十人程度である。実際にはまったく別の地域に同じクル教の会衆が存在しているかもしれないがマセルたちに知る術はなかった。

マセルとリギルはともに青年となり家族を持つようになった。もちろん互いに憎しみ合ったり、嫌っていたりするわけではない。会衆の中では他の者と同じようにあいさつや会話もするのだが、二度と幼いころのように打ち解けることはなかった。

ところが、マセルの妻は子を産んですぐに死んだ。そしてマセルが26歳の時、その最愛の息子であり、かつ残された唯一の血縁者であったシリまでが死んでしまった。マセルが死後の魂の継続について強く信じるようになったのはその後のことである。

クル教には分厚い經典はおろか禁忌や戒律すら皆無で、信仰上の決定的な規準は「十言」だけであった。それはクル自身が語ったと口伝される十の短い言葉に過ぎず、その第一は『クルを知る者はみな天にある』である。このことからマセル自身は天国や地獄というような場所があるはずだといつも主張したが、それが先に逝った妻や息子シリを慕うあまりの願望であるのは周知であった。

「我々には知り得ぬクルの御心をそう決めつけては盲信となるぞ」

とマセルに忠告するものもいた。マセルはどちらかといえばいつも淡淡々として感情を表に出さない男に育っていたが、シリたちとの再会を願うマセルはこの時ばかりはあからさまにその忠告を拒んだ。

「俺は天を信じる。クルを知る者はみな天にある。第一、天国があると思おうが、ないと信じようが他人が咎めることではない」

確かに、クル教は排他的一神教でありながらその信仰の内容について凡そ素朴でおおらかであり、会衆ではこのような議論は日常的なものであった。それは唯一の拠所である十言そのものがあまりに漠然としていることの必然であった。

また会衆の中には、マセルの哀れな身の上を子供時分の一件と関係があるのではないかとささやく者もいた。マセルはクルの報いを受けているのだと。もちろん直接にそれをマセルに質するようなものは誰もいないが、そんな話を聞かたびにリギルが反論した。

「クルがそんなことをするというのか！クルは呪いの神ではない！」

こういう時リギルはあまりにも激昂するので周囲の者はいつも驚いた。リギルは、マセルが時折ひとりでクル像の前に跪いて、昔自分が蹴った辺りをそつと撫でたりするところを度々見ていた。リギルはそのたびに内心では自分のことのようにマセルの苦しみを思っていた。だが、実際にはマセルにその思いを伝えることはおろか、ほとんど声をかけることすらできないままだった。

リギルは、友として何もしてやれない自分をいつも呪っていた。本当ならマセルの一番近くにいたべき友はリギルだったはずだ。

マセルはクセルや他の会衆の者たちから何度も再婚を勧められたが頑なに断って40歳を過ぎた。そしてちょうどそのころ、会衆は最大の危機に直面した。会衆を含む一帯を治めるバツカノ王が禁教政策を取り始めたからである。

すでに付近の多くの都市が王の要求を拒否したために滅ぼされていた。最初クル教の会衆は、積極的な布教活動も行わず規模もごく小さいために迫害を免れるかもしれないと希望を持っていた。しかしついにその希望は打ち砕かれようとしていた。

王の使者が現れ、会衆に最終的な決断を迫った。会衆の全員がいかなる神の信仰者でもないということを示す儀式に参加しなければバツカノ領内に居住する権利をなく奪するという。

統率のとれた管理体系を持たない会衆は混乱した。男たちは毎日のように集まったが議論は堂々巡りだった。

王の使者は会衆の様子をたびたび監視に来るようになった。彼らは特に何の指図もせず表向き紳士的な態度でクセルたちに接した。

そのうちクセルたち一部の者が王国の命令通りに忌むべき獣の像を作り始めた。この獣像は、自分たちがクルの信徒ではないということとを公に示すために王国の儀式殿に納めるためのもので、その獣像の前で、会衆の男たちは自分たちの手でクル像を破壊することになる。

居住権のはく奪と言うが、付近一帯の状況から見て、獣像の献納と

会衆全員の儀式への出席をもし拒めば王の軍勢がたちどころに会衆とその家族全員を虐殺するだろうことは明白だった。

会衆の総意がまとまらないままに獣像を作り始めたクセルたちに異を唱える者も多くいたが、といって別に何の策があるはずもない。このままでは命令に従うにしろ準備が間に合わない。クセルたちがとりあえず獣像の制作に取り掛かったことは、ある意味合理的な判断だった。

結局、会衆は何ら最終的な決断に至らないまま選択の猶予を失った。

指定された儀式の日が近づいた。この晩、会衆の男たちは全員が会所に参集した。明朝に出立しなければ儀式に間に合わない。会所は重苦しい静寂に包まれ、一様に黙って俯いた男たちを燭台の灯りだけが照らし続けていた。

クセルは徐に一度振り返ってクル像を見ると、次に一人一人の目に順繰りに訴えるようにして言った。

「クルを知る者はみな天にある……たとえ形ばかり屈しようと我らの心には常にクルがいる。このことを忘れてはならない」

もちろんこれは、何度も繰り返し議論されたことである。しかし時に及んで会衆の者はほとんどが黙って頷きクセルに賛同を示した。

だがリギルがクセルの目を睨み返すと言った。

「クルを象ればクルが宿る！クルのほかに神はいない！」

クセルが苦々しい表情でリギルを睨み返した。これも何も新しい発言ではない。そしてここにいる誰もがリギルの言い分にいかなる反論もし得ないことを承知していた。

リギルはクセルの唱えた『クルを知る者はみな天にある』という十言に対し、別の2つの十言『クルを象ればクルが宿る』『クルのほかに神はいない』をもって反論したに過ぎない。会衆はこの日に至るまで延々とこの議論を繰り返していた。

「やはり俺は逃げる」

リギルは宣言した。

「俺は今夜、妻を連れて逃げる。クラサキに身内がいる。とりあえずそこへ向かう」

クセルは思わず立ち上がって叫んだ。

「そんなことをすれば私たち全員に、ああ、それだけでなくクラサキにまで危害が及ぶ。軽はずみな行動はよせ！リギル」

「クセルよ。あなたはいつも洞察深く信用できる俺たちの兄貴だ。しかし今夜ばかりはあなたに従うわけにはいかない。俺は行く。たとえ殺されようと、これが正しい道だ」

リギルはそう言うのと席を立った。クセルは呼び止めようとしたが言い得る言葉が見つからないまま立ち尽くしていた。何人かが深くため息をついた。

リギルは会所を出ようとしたが不意に立ち止まり、男たちを振り返ると大声で言った。

「マセル。いっしょに行こう！」

男たちはハツとしてマセルの顔を見た。マセルは何も答えなかった。

リギルが出て行ったあと、クセルたちは不本意ながら王の命令に従うことでほぼ一致した。ただマセルだけはその議論にほとんど参加せず黙って成り行きを聞いているに過ぎなかった。

散会の時、クセルは心配だったのでマセルに念を押した。

「マセル。まさかお前も逃げるつもりではあるまいな」

実は、クセルはリギルのことよりもむしろマセルの行動に不安があった。それはリギルの場合と違い、マセルには案ずるべき身内が一人もないからである。会衆のだれもが家族や親族に危害が及ぶことを何よりも怖れている。しかし、マセルは淡々とした笑顔でこう答えた。

「大丈夫だよクセル。心配ない」

マセルはこういう時口から出まかせを言うような男ではない。クセルは安心して、勢い込んでこう付け足した。

「そうだろう。お前は賢明な男だ。なに、リギルだって大丈夫だ、リギルの妻は聡明な女だ。奴らが軽はずみな行動をとることはないだろう」

マセルは笑顔のままだったが、それには何も答えずひとり家路に着いた。

すでに夜も更けていた。家に帰るとすぐにマセルは出立の準備をし

た。といっても、すでにこの日に至るまでに家の中はすべて整理してあったので、儀式殿まで行くのに必要な水と食料と若干の銭貨、そして愛用の短剣の準備を確認するだけだった。

その後マセルは「いっしょに行こう!」と叫んだリギルの心中を察して一人微笑んだ。

リギルの思いは分かっている……あれ以来ずっと。マセルは今まで何度となく思い返した場面をまた思った。自分がクル像を蹴ったとき、必死にしがみついて泣いていたリギルの顔を思った。

……あの時、なぜリギルがあんな態度をしたか、自分はなぜクルを蹴ったのか、そして、なぜリギルと自分はそれ以来ほとんど口を利かなくなったか……。

実は、マセルはそんなことはどうでもいいことだと考えていた。いくら考えても、自分にすらその理由は言葉にできない。しかし、そんなことはどうでもいい。マセルにとって、リギルはまだ唯一無二の親友だったのである。マセルはその気持ちを今まで一度も失うことがなかった。そして、互いに伝えないままであれ、リギルもきっとそう信じているに違いないという確信があった。それで、リギルが「いっしょに行こう!」と言ったことに驚かなかった。マセルの心はいっしょになく落ち着いていた。

マセルは、その後夜明けまでクルに最後の祈りを捧げ、一睡もしなかった。そして明け方早々に家を発った。会所に向かう途中にリギルの家に寄ろうと考えていた。

もうこの家に戻ってくることはない、と思った。しかしマセルは感傷を断ち切るためにあえて振り返らなかった。

マセルがリギルの家に着いたとき、リギルは外にいた。自分の家の前の石段の真ん中に胡坐をかいて、眠っているわけではないだろうが、いつからそうしているのか俯いたままじっと動かない。マセルはリギルの正面に立ち止まった。

「弱いと思うか？この俺を」

マセルの気配に気付いてリギルは独り言のように聞いた。

「……リギル、そこで俺を待っていたのか？」

リギルの顔を覗き込んだがリギルは目を合わせようとせずじっと俯いて座ったままだった。

「クラサキを巻き込みたくはないと……それにお前たちを置いて逃げれば裏切り者のそしりを被ると」

「反対されたのか」

「ああ冷静になって考えれば妻の言うとおりだ。すまない、マセル」
「俺に謝ることはない。逃げて助かるものなら俺でもそうする。誰も責めはしない」

少しの沈黙の後に、マセルがふと思い出したように笑ったのでリギルは初めて顔を上げた。青ざめていた。

「何を嗤う」

「いや……お前が俺に謝るのはあの時以来だな。リギル、お前のせいで俺はさんざん叱られたんだ」

二人は、あの一件以来初めて互いに顔を見合せて笑った。マセルはリギルの手を取って立ち上がらせた。それから二人はもう何も言わずいつもの道を並んで歩いた。

集会所に着き、マセルが先に入ろうとするとリギルは意を決したようにマセルの背中に向かって言った。

「本当に行くのか。これは明らかにクルへの裏切りだ。お前がふざけて蹴った時とはわけが違うぞ！」

青ざめたりギルと対照的にマセルは落ち着いた表情で振り返ると言った。

「大丈夫だ」

マセルの死 1

すでに会衆には男たち全員が集まっていた。クセルが待ちかねたように告げた。

「おお。来たのかりギル、お前たちで最後だ。今も皆と話し合ったがやはり従うしかない」

リギルは軽蔑するような表情で立っていた。

「我々だけではない。もしここで我々が抵抗すればクル教そのものがこの世から消えてしまうかもしれないのだ。何としても生きなければならぬ。どんな汚名を着せられようと我々は生きて伝えるのだ、クルの言葉を」

「おお……」

一同が頷いた。クセルはもう言うべき言葉はないとばかり視線を背けてため息をついた。膠着する空気が流れた。

「行きましょう」

マセルが言った。リギルは終始黙っていた。

クセルたちが作った獣像は集会所の裏手に野ざらしのまま置かれていた。中がくり抜かれた木製の顔と胴体が組み合わされており、その継ぎ目に金属の飾り物が不規則にあつらえてある。クル像よりも一回り大きいが見るからに雑な作りであった。男たちは引車にまず獣像を乗せると荒縄で縛りつけた。

次に自分たちのクル像を運ぶためもう1台の引車には何重にも筵を敷いた。クル像は凝灰石に精巧な彫刻を施した威厳のある立ち居姿で、丈は人と変わらないが獣像よりもずっと重い。

「そおつとそおつとな」

クセルの誘導で引車の上にクル像が慎重に横たえられた。

支度が整うと遠巻きに眺めていた女子供たちが近付き、それぞれに抱き合って言葉を交わしていた。しかし、ついに獣像を乗せた引車がクセルを筆頭に出発した。少し遅れてクル像を乗せた引車も発った。見送る女たちは跪いてクル像に最後の祈りを捧げた。取り乱して嗚咽する者もいた。

ほぼ一昼夜運び続けてマセルたちはようやく支配者の儀式殿に着いた。先頭のクセルが儀式殿の大門の前に立ち止まり、上部に打たれた銘を読もうとしたが逆光でよく見えなかった。マセルはクセルの傍らに進み出ると促しながら先に大門をくぐった。

「さあ行こう」

会衆の男たちは門前に引車を置いたままマセルに続いた。大門をくぐると、すでに各地で迫害を受けた人々が運び込んだ獣像たちが中門へ続く渡り廊下の左右からマセルたちを睨んでいた。獣の顔や腕足などはそれぞれの異教徒たちの勝手な解釈で作られているのでまちまちであった。ただその形相は一樣に邪悪で不気味であった。

奥から儀式を取り仕切る官吏が大仰な数の兵を従えて現れた。

「定刻だ。君たちで全員か」

「そうだ」

クセルは答えた。

「君たちが作った像はどこか」

官吏が事務的な口調で尋ねた。クセルが何も言わず大門の前の引車を指差した。

「よろしい。ではすぐに儀式を執り行う。お前たちの神の墓は……」

官吏が歩いて敷地内の適当に空いた一面を足で踏んで示した。

「ここにする」

兵士たちがその場所までクル像を運びこんで立たせた。クセルたちが作った獣像も運ばれて、それは予め準備された台座の上に、クル像を上から睨み付けるかのように配置された。

官吏はマセルたちが作った獣像を見て「ふん」と侮蔑的な声を漏らすと兵士たちに顎で指図した。すると兵士たちはマセルたち一人ひとりを両脇から押さえつけて歩かせ、それぞれを跪かせた。マセルたちはちょうどクル像を背に、獣像に向かってひれ伏すような格好で並ばされた。

兵士たちはマセルたちに、それぞれにかなり重さのある鉄製の鎚を渡して持たせておいて、マセルたちがじっと動かないのを確認して獣像の前に整列した。会衆の者たちは獣像に忠誠を誓わされた後、この鉄鎚で自らクル像を叩き壊すのである。いよいよ引き返せないところに来た。

「各々、そのまま目を閉じ聞けい！」

兵士が号令をかけるとマセルたちは鉄鎚の柄を肩で支え、跪いた姿勢のまま目を閉じた。

「では式典を始める」

官吏が進み出て、いかにも権威的な口調でしゃべり始めた。

「君たちは我が王の民であり、王の民は須く信教が禁じられている。

よって君たちがもし何かを信仰しておるならバツカノ領内に留まることはまかりならん……これから私が言う邪神を信教するものは名乗り出でよ」

官吏が一度マセルたちの様子を見回した。マセルたちは目を閉じたまま聞いた。

「よろしい……ではこの中にヤマを信じる者がいるか」

「この中にブテを信じる者がいるか」

「この中にアラメラを信じる者がいるか」

「この中にワシンを信じる者がいるか」

「この中にスメラを信じる者がいるか」

「この中にビドゥを信じる者がいるか」

「この中にケノオを信じる者がいるか」

「この中にナムラマを信じる者がいるか」

「この中にヤーを信じる者がいるか」

「この中にキザスを信じる者がいるか」

「この中にブラムを信じる者がいるか」

もちろん官吏はこの会衆の信じる神の名がクルであることを承知していた。会衆の者たちは目を閉じて官吏の言葉をやり過ごした。そのうちにクセルたちは官吏の声の背後から獣像が自分たちを睨みつけているような不思議な錯覚に陥った。悲観や憎悪よりもどす黒い恐怖のような感情が湧き起こってクセルたちは朦朧としてきた。

しかしマセルだけは違っていた。マセルは密かに薄らと目を開いて、官吏が自分の神の名を呼ぶのを静かに待っていた。官吏の不毛な問いがまるで永遠に続くかと思われたそのとき、ついに官吏が決定的な名を言った。

「この中にクルを信じる者がいるか」

「ここにいる！」

マセルがいきなりクル像に飛び掛かって鉄鎚を叩き落とした。クル像は破片を飛び散らしながらぶっ倒れた。他の者はみな呆気に取られていた。その猶予にマセルはさらに何度もクル像を打って、クル像はただの石塊のようにばらばらに壊れた。

クセルやリギルたち、それに官吏とその兵士たちもマセルがなぜ獣像ではなくクル像を打ち壊すのか理解できなかった。官吏がやっと叫んだ。

「何をしている。ヤツを止めい！」

兵士たちが我に返ってマセルを取り押さえようとした。しかしマセルはそれに呼応するように鉄鎚を投げ捨て、あっという間に官吏の懷に飛び込むと脇から取り出した短剣で官吏の腹の真ん中を躊躇なく突き刺した。

血が飛び散った。兵士たちは一瞬たじろいだ。官吏はその場にうずくまるように倒れたが、次の瞬間マセルも兵士たちの槍に仕留められていた。

マセルは息絶えた。

次に目を覚ましたとき、マセルは古びた屋根裏部屋のようなところにいてベッドに横たわっていた。マセル自身の体感では、死んでから目を覚ますまで10分ほどしか経過していないように思えた。そして自分がマセルであり、自分は死んだのだということもすぐに理解できた。

「これが地獄か……」

どうやら現世での記憶はまったく損なわれていないようだ。

マセルは、リギルやクセルら会衆の全員がああ儀式でクルへの反逆者となるよりも、ひとり自分だけがクル像を打ちこわしてしまえば会衆の他の者たちは十言に背くことにならずに済むと踏んだ。

そして現実にはほぼマセルの思い通りになっていた。

マセルに刺された官吏は一命を取り留めたが、自分の失態となることを恐れて経緯を歪曲して報告したからである。記録上ではマセルがひとり逆上して刃向ったために処刑され、それ以外の者たちは従順にクル像を破壊し、儀式そのものは定め通り完了したことになるのである。

マセルは目が覚めてから何日かずっとこの屋根裏のような部屋に閉じこもっていた。マセルは直接事の経緯を確認することはできなかったが、少なくとも自分の目論見は無駄ではないと確信していた。

ただし、その代償に自分は地獄へ落ちざるを得なかった。覚悟して

いたことだが、これでシリと再開する希望が永遠に絶たれたという絶望感はどうすることもできなかった。だがそれを和らげてくれたのはヌルであった。

毎日の食料や必要な品をタミルノという男が運んできてくれた。そしてヌルはタミルノの息子であった。ヌルはシリよりも、つまりシリが死んだときの歳よりも少し大きいが同じ男の子で、マセルはそれにシリの面影を重ねていた。

シリはタミルノが来るときはいつも一緒に来る。それだけでなく、タルミノとは別にひとりでも遊びに来た。

マセルはこの場所と自分の状況について少しずつ聞いた。今マセルがいるこの場所は、ヌルやタミルノに聞いたところでもやはり地獄には違いないようだった。しかしマセルは少し不思議に思っていた。まずここは現世での罪によって責めを受け続けるというようなところではなく、むしろいたって平穏な世界のようなだ。第一、寝食する場所や着物、食糧、それに健康な肉体もそのままある。何というかここは現世に類似した世界に思えた。

ただ明らかに違う点が一つあった。

「何か必要なものがあつたら遠慮なく言ってくれ。まあ……言わなくても分かるがな」

タミルノはマセルに初めて会ったときそう言った。マセルは特に違和感なくその言葉を受け取り、

「ああ、すまない」

と答えた。しかし、その後でヌルが言った。

「マセル？ どうして言わなくても分かるか、分かる？」

マセルはその質問の意味が分からなかったので答えずにいるとヌルはおかしなことを言い出した。つまりこの世界にいる人間たちが互いに言葉を交わさなくてもある程度意識を澄ますと相手の心が読めてしまうということだった。マセルは最初それを本気にせず笑っていたが、ヌルがしつこく言い張るのでまさかと思ってタミルノに聞いてみた。

「確かにヌルの言うとおりだ。ここではみんな筒抜けさ」

タミルノまでがそう言った。マセルはまだ半信半疑だった。その様子を見てタミルノはヌルに言った。

「ヌル、俺が出かけてる間、お前マセルと一緒に遊んでな。人の心

を読むやり方をマセルに教えてやってくれ」

「あ、いーよ！」

ヌルは元気に答えた。

「まあ特に訓練なんかなくても、ここにいる奴らはみんな自然にそうなる……それより、そもそもこんな力があってもここじゃ何の役にも立たないがな。まあヌルの相手をしてやってくれよ」

タミルノはマセルを見て笑った。

タミルノが出かけると、マセルがまだ疑っているを見て、まずヌルは次々にマセルが考えていることを言い当てていった。あまりに当たることが多いのでマセルも信じざるを得なくなった。

次にマセルはヌルを相手に心が読めるかやってみた。最初は自分の考えかヌルの心なのか混乱するような感じでよく分からなかったが、ヌルが飽きずに付き合ってくれたので少し慣れるとマセルにもある程度意識的にそれができるようになってきた。

マセルは、今度はヌル以外の他人の心が読めるかやってみた。まだ一度もこの部屋から出たことはないが、タミルノたちの様子からするとこの辺りは集落のようになっており、ある程度の数の人が住んでいるはずだ。だれかしらの心が読めるのではないかと考えた。しかしタミルノとその息子ヌル以外の者では心を読むことはできなかった。

半時ほどしてタミルノが戻ってくると、マセルより先にヌルが練習の成果を得意げに話した。タミルノがヌルの背中を軽く叩いて褒めると、ヌルは照れくさそうに笑った。

「ある程度親しくないとい心は読みにくい。まあ初対面でも目の前にいる人間なら読むことができるんだが全く知らない他人の心は読めないぞ。そもそも特定できないと」

タミルノが先輩らしく解説した。

「ほらね。だからボク言ったでしょう？」

ヌルが少しふくれて口を挟んだ。しかしマセルはヌルの様子よりも自分の関心で頭がいっぱいだった。

「なあ、ということは、ここでは全員が互いに心を読めるということだな。俺のことも」

タミルノはマセルがそう聞くのもすでに分かっている、というような顔で微笑みかけると、解説した。

「そりゃそうだ」

「信じられない……」

「だろうな……だからここに来て、いきなり人には会わせないようにしている。お前はなぜかとても落ち着いているけど、かなりパニックになる場合もあるからな。そもそも自分が死んだことすら認められないような場合もあるし、たいていは事情を理解するまで時

間がかかる」

「ボクは大丈夫だったけどなあ」

ヌルがまた口を挟んだ。

「お父さんが教えてくれたから」

この地獄には子供もいるが親子が揃っていることは少ないんだ、と
タミルノが補足した。

マセルはシリのことを想った。するとすかさずヌルが聞いた。

「マセルの子はもう死んだの？」

「ああ、お前より小さいうちにな。事故だった」

「そう……僕は死ぬ時お父さんと一緒だったから良かった」

「そうだな」

「マセルの子は……うんと……シリっていう名前なんだね」

「ああ、そうだよ」

「シリ……きっと天国のほうに逝っちゃったんだね」

マセルはシリを想いながら答えた。

「そうかも知れないな……」

「うん。本当は僕も天国に行くと思っていたんだけど……やっぱり
僕が悪い子だったの、クルは知ってたのかな……でも僕はお父さん
と一緒にだからこっちのほうがいい」

「そうか……え？ お前もクル教なのか？」

「え？ そうだよ。お父さんも僕も……ここにいる人たちはみんな
そうだよ」

タミルノに確かめたが本当らしかった。

「きっと何かあるぜ。ここの住人はみんなクルの信徒だ。俺は今でもクルが唯一の神だと考えている。だとしたらここにクルの信者ばかり集められているのは何か意味があるんだ。何かは分からないけどな……」

マセルはタミルノの言葉を聞きながら、同時にタミルノの心を読んでいた。しかしタミルノが言うとおり、心が読めることがそれほど役に立つとは思えなかった。

「ま、とにかく俺は俺の仕事をするだけだ。困ったことがあればいつでも言ってくれ。まあ、言わなくても分かるがな」

タミルノは豪快に笑った。とにかく、もつとこの世界のことを知る必要があるとマセルは思った。

タミルノの親切 1

マセルはしばらくこの部屋にいて寝起きしていたが、この部屋には窓すらなく、今昼なのか夜なのかも判然としない。タミルノが次に来たとき、マセルは外出したいとを告げようと思っていた。するとそれを察したかのようにタミルノが訪れて言った。

「もうそろそろ外へ出たくなつたろう。これからみんなに紹介するよ」

マセルはここへ来て初めて外へ出た。

屋根裏のようだと思っていたが、外から見るとマセルがいた建物は自然石を組積した平屋建てだった。付近に立つ木々には血管のように複雑な枝があった。人影はなく、遠くに隣家と思われる同じような建物がぽつん、ぽつんと立っているのが見えた。

赤土色の道をタミルノとヌル、そしてマセルが歩いていった。外は薄暗く、空はだだっ広く夜明けとも日暮れとも取れる色をしていた。ヌルの歩調に合わせてゆっくり来たので20分ほど歩いていると思ったが、空は変わらず夜明けとも日暮れとも取れる色のままだった。

タミルノの家の前まで行くと、おそらくタミルノが今日マセルをみんなに会わせようと考えたのが伝わったのだろう、すでに何人かの住人がマセルが来るのを知って集まっていた。

「こいつがマセルだ」

「マセルだ。よろしく」

マセルはよくは分からないが一応型どおりのあいさつをした。

「じゃあみんな入ってくれ」

タミルノの家はヌルと二人暮らしにしてはかなり広かった。そして住人達の様子から察して、タミルノは少なくともこの中ではリーダー的な存在で、みんなから頼りにされているようだった。

タミルノがみんなに、マセルがすでに人の心を読めるようになっていることを話すと、みんな大袈裟にほう、と感心して見せた。そして、ここの住人達は互いに心が読めることが分かっているが、それはむしろ日常的には面倒な場合が多いと言った。だからやはり現世と同じように口から出る言葉を用いているのだと……だが邪悪な発想や淫靡な妄想まで仲間に筒抜けであるのも事実だ。新参者の自分にはいきおい注目するはずだ。とにかくここの様子が分かるまでは警戒するに越したことはないだろう……マセルは住人達の話聞きながらそう考えて、はっと気が付いてみんなを見た。

今考えていることもみんなに知れてしまうのだ。これでは余計な不信心を持たせてしまうと思った。だがタミルノは笑った。

「そんなに心配することはない、マセル。こいつらはみんないい奴らだ。それに全員クルの信仰者だ。安心しろ。まあ……気持ちには分かるがな」

他の者も笑顔でマセルを受け入れている。マセルはむしろ恥ずかしいような気持ちになって少しひきつつた笑顔で頷いた。

タミルノとヌルは宴の料理を次々に運んできた。マセルには馴染みはないものばかりだったが、何というか、とても豪勢に見えた。その間、住人達は立ち代りマセルにこの世界の様子を話して聞かせたが、マセルは混乱するばかりであまりよく分からなかった。とにかく誰もが新入りの到着を歓迎していることだけは分かった。

マセルは最初、ここは本当の地獄ではなく、いわば入り口に過ぎないのではないかと思った。あまりに豊かで平穏だったからだ。しかし住人達の考えはそれとは違った。

支度をしていたタミルノが戻ってきて座ると手招きしてマセルを隣に呼んだ。それを見た皆もそれぞれに卓を囲んで座った。タミルノは樽から茶酒を注ぎながら言った。

「おそらくはだ……俺たちが生前言っていた天国とか地獄ってのは一つじゃなくて無数の階層に分かれているんだ。今いるところはおそらく地獄の中でも一番住みやすい場所なんだろう」

マセルは住人達の心を読みながら聞いていた。タミルノやヌルはもちろんここに集まった住人達の中にそれほど極端な悪人はいないように思えた。それなりに悪癖や我欲のようなものも読み取れるが、どれもごく普通誰でも想起する程度のものであり、それはマセル自身も同じことだと思った。

すると現世で悪人だった者たちはどこに行ったのか。そう考えると確かにタミルノの言うことも見当外れではない。死んだ人間たちはその罪の重さによって無数に隔離されていて、それぞれに異なる環

境が用意されているのかも知れない。

「つまりはここに暮らしてる俺たちは割と善人だったってことだ」

タミルノは冗談めかして笑った。マセルはタミルノが嫌いではなかった。時折悪ぶった態度をするが誰よりも息子を愛する憎めない男であることは分かっていた。

「そういうこと！　もっと罪深いヤツらだって、のうのうと生きて
いるんだからな」

住人の一人ががそう言った。マセルは作り笑顔で頷いたが「罪深い」という言葉に心が疼いた。ここへ来て、一人部屋の中でずっと思いつらせていたことだが、マセルは自分が信仰上最悪の罪を犯したかもしれないと感じていた。

会衆を守るためにやむを得ないことと言って、クルを自らの意思で打ち壊すことに比べて一体何が罪だと言うのか。いや、これは本当に会衆のためだったのか。自分たちの命を長らえさせただけではないか。情に流され自己犠牲を気取った。どうせ俺には身内はいないからと……

「さあ！」

タミルノが急に大きな声を上げたのでマセルははっと顔を上げた。

「思うところはいろいろあるだろうが、とにかく今日はマセルの歓迎だ。これから長い付き合いになるんだ、よろしく頼むよ」

マセルはタミルノの気遣いに感謝した。そして今いろいろ悩んでも

この場を白けさせるだけだと思って無理に作り笑いをした。

3

マセルは遠慮なく食べ、飲んだ。野菜や生肉のようなものはないが、それぞれに工夫された料理でどれもうまかった。

「しかし本当にここは地獄か。この豊富な食料は、何というか……これじゃ生きてたとき以上じゃないか」

マセルは大仰に驚いて見せた。それを見てヌルは得意げに言う。

「あのね。本当は別に何も食べなくてもいいんだって。ただ僕はやつぱりおなか減る気がするから毎日何か食べるんだけど。食べなくても平気なんだって」

ヌルはここではマセルより先輩格のつもりなのでいろいろ説明したがった。マセルは驚いて見せた。

「へえ、そうなのか？」

「うん。みんな何か食べたい時だけ市場から持ってくる」

「そうか。市場もあるのか……でもその市場って誰がやってるんだ？」

「うん市場はおじさんたちがやってる。なくなったら終わりだけどみんなタダ」

「タダ？ 本当なのか？」

マセルは思わずタミルノのほうを向いて、確かめた。

「本当だとも、ここにある料理も全部タダだぞ。な、ヌル」

タミルノが念を押すように言ったが、ヌルは自分の言ったことをマセルがもう一度タミルノに確認したので少しふくれていた。住人たちが口を挟んだ。

「だってワシらはたぶん永遠にここで暮らすしかないぞ。地獄に来てまで金だの財産だの、貯めたところでどうするってこともできないのに……」

「本当。金の心配をしなくていい分だけここは天国だよ。マセルさんだってそう思うだろう？　なのにアジヨ派の連中ときたら、一体何を考えているんだか」

マセルは住人達のうち数人の心が急に曇ったように感じて不審に思った。

「アジヨ派というのは？」

「あ、マセル。アジヨ派の人たちはね……」

ヌルがすかさず説明しようとしたが、タミルノがそれを遮るように言った。

「まあ、それはまた今度話すとして明日さっそく市場に行ってみたらいい。ヌル、明日マセルを市場に連れてってくれ。お前なら案内できるだろう？」

「うん！」

ヌルは得意げに返事をした。

翌日マセルはヌルの案内で市場へ出かけた。その途中、マセルは空の色がずっとまったく変わらないままだと気が付いたが、たまたまだろうかと思った。

「ヌル。今は何時くらいなの？」

「うん、ここには時間なんかないんだよ……ああ、空のことだね」

「そうなんだ。昨日から全然変わっていないように見えるんだけど」

「そうだよ。ずっと同じだよ」

「じゃあ、夜になったり、朝になったり……そういうことはないってこと？」

「うん」

マセルとヌルは取り留めない会話をしながら道を進んでいった。何人かの人とすれ違ったが、みんな気さくに声をかけてくれた。

「あそこが市場だよ！」

ヌルは元気よくそういうと、少し急ぎ足になった。遠目には市場と言ってもただっ広い赤土色の広場に、それぞれが露店を出しているような感じだった。しかし、近付いて見てみると市場は賑やかで思いのほか棚が多く、生活に必要なものはほとんど何でも揃っているように思えた。マセルは本当にここが地獄なのだろうかと思った。

ひとしきり回って見た頃、新たな一群が現れて、少し離れた場所に棚を開けはじめた。このように市場には入れかわり立ちかわり人がやって来て、持ってきた品物を捌き終わると帰っていくのだろう。マセルは今来た人たちのほうに近付こうとした。

「あマセル。そっちは言っちゃダメ！」

「え？」

「あいつらはアジョ会衆だよ。あいつらはいつも変なもの売ってるんだ。それにあいつらのところはお金がないと買えないよ」

「そうなのか？」

マセルは昨日住人たちがアジョ派の奴ら……という話を思い出した。

「あいつらは何か悪いことをしてるんだよ」

「ふ〜ん……」

「あっちに行ってみようよ。あそこにおじさんが来た」

マセルは不思議に思ったがヌルに聞いても詳しく分かるはずもないと考えてそれ以上聞かなかった。

おじさんというのはタミルノが馴染みにしている主人で、ヌルとも親しいようだった。ヌルは得意げにマセルを紹介した。

「おじさん！ マセルを連れてきたよ」

「ああ、あんたがマセルさんか。どうだったい？ 俺の作った料理はうまかったろう？」

マセルは突然でよく分からなかったが、きっと昨日の料理がそうなのだろうと思って礼を言った。

「ああ、とてもおいしかった。生きてたときも、あんなに御馳走を食べたことはない気がするよ」

おじさんは上機嫌になってはっはっはっ、と笑った。マセルは遠慮

したが半ば押し付けるかのように食料と衣などの日用品を持たされた。マセルは気になっていたことを尋ねた。

「あっちはアジヨ派とかいう人たちだそうだが……」

「ああ。まあ、あんたまだ新参だろう？ 今日のところは近付かないに越したことはないな。まあヌルと一緒になら心配はないだろうが……」

あまり詮索しても不審に思われるかもしれないと考えて、マセルはそれ以上聞かなかった。もう一度礼を言つて、マセルとヌルはいったん家に戻ることにした。

タミルノの家に戻り、荷物を降ろしてからマセルはまたヌルを連れて、昨晚会った住人たちの家を訪ねて回ることにした。ヌルはほとんど先に走って行つては、ここはだれの家、ここはだれの家だと教えてくれた。住人達の家はどれも同じような石積の外観だったが、中はかなり広いように入り口から中の様子はほとんど分からなかった。しかしマセルが声をかけるより先にヌルはだれの家でも「マセルが来たよ」と大声で勝手に上り込んでいった。

留守の者やまだ眠っているものを除いて、会つて話ができただちは皆とても気安く接してくれた。ヌルを連れていたこともあつてマセルは気まずい思いをせずに済んだ。マセルはアジヨ派のことについて控えめに尋ねてみたが、とにかくどの住人もみなアジヨ派をあまりよく思つてはいないようだった。

ヌルについて回るような形になってマセルはいささか疲れた。マセルはタミルノの家に戻つて、水を飲んでから少し休むことにしたが、ヌルが外で遊びたがったので家の前に腰を下ろして、今までのことを整理しようと思ひ出してみた。

この世界自体がどこまで広がっているかは分からない。しかし、少なくとも知り得る範囲で現存するこの住人たちは、アジョ派も含めてその全員がクル教の信徒のようだ。とすると、やはりこれが地獄の全貌ではあり得ないだろう。

マセルが現世において属していた会衆のことも尋ねてみたが誰も知る者はいない。縁のある人間がまったくいないのはさみしい気もしたが、ここは地獄なのだから却ってそのほうがいいのだとマセルは一人納得した。

タミルノたちは特に組織だった統率もなく生活しているようだが、アジョ派という一派が閉鎖的なのでそれ以外の者は必然的にタミルノたちと親しくなるようだ。アジョ派は特に許したもののしか仲間と認めない。内部では独自の統治体制があるらしい。そしてグループ内でのみ流通する貨幣も使用している。

さつき市場でヌルが言っていたアジョ派の一角では、やはり貨幣を使って取引しているらしい。住人の話ではそこで売っているのは煙草のような弱い麻薬とか異常な酩酊を誘う媚薬のようなもの、またクルを象った装飾品や携帯具などだという。

確かにいかがわしい。ただし、考えてみればそれらが信仰上明らかに悪であるとも言いきれないとマセルは思った。そもそもクル教は禁忌とか戒律といったものとは無縁の宗教であるはずだ……ふと、マセルは、もしかするとタミルノもそう考えているのかもしれないと思った。そして、タミルノはああ見えて案外と理知的な人物なのかもしれないなどと想像した。

そもそもマセルはこの住人達がなぜ地獄に引き渡されたのかと感じる。もちろん自分自身はある意味その覚悟をもって死んだ。いわば地獄を選んだのである。しかしこの住人達はみんな素朴で善良な人々に見える。現世でいったい何があったのか。それとも、クル教の信徒であること自体が関係しているのか？

あるいは……もしかすると、自分はまだこの世界の本当の姿を見せられていないだけなのではないか、という考えが頭に浮かんできた。しかし、そこでマセルは自分が疑心暗鬼になっていることを他の住人に知られるかもしれないと気が付いてその考えを否定した。しかし、少なくともなぜヌルまでが……マセルは混乱してきた。いずれにしろ、これからもっといろいろなことを知っておかなければならないことがあるようだ。一度大きくため息をついてから

「ヌルー！」

と声をかけた。

ナモクの意志 1

人が喫煙する最大の理由は退屈である。アジヨ会衆の統治長ナモクは喫煙する男だった。

ナモクは、なんとしてもタミルノの懐柔が必要だと考えていた。タミルノが対抗勢力の中心的存在だからというだけでない。タミルノは唯一、この地に死者を招き入れる特権を持っていたからである。実は、マセルが死んでこの世界で目を覚ましたとき世話を受けたのがタミルノだったのは偶然ではない。マセルだけでなく、この集落にいる全員がそうなのである。アジヨ会衆の統治長ナモクすら例外ではなかった。

生前ナモクが属していた会衆はかなり規模が大きく、新たな入信者も増え続けていた。ナモクたちは会衆内に組織的な管理体制を確立するべきだと主張していたが、これに反対するものも多かった。その頃から会衆の人々は信仰上の是非をめぐってたびたび争うようになり、派閥を成して反目しあうようになっていた。

ナモクは50歳を過ぎて病死した。そして地獄に来たとき、ナモクは驚愕し、また時とともに絶望せざるを得なかった。なぜなら生前ナモク一派に属していた者たちだけが死後こちら側に現れることに気が付いたからである。生前敵対していた人々のほうが天国に行ったものと解釈するしかない。つまり、クルの目から見てナモクたちは否とされたに違いないのだ。

最初の頃ナモクはそれを納得できず、タミルノを相手にとくとくと自説を語ったものだった。そしてこの地獄で自分の信じる体制を再現しようと仲間を募りアジヨ派の母体を作った。貨幣の流通、クル

神像の常時携帯、生産物と市場の一元管理などを通してアジヨ派は次第に勢力を拡大し今に至っている。

ナモクの最終的な目標はこの地にいる全員をアジヨ会衆の統治下に置くこと、つまりこれを単なる派ではなく唯一の統治機構とすることである。しかし、新たな死者が常に最初に接するタミルノがこれに参画していないのは決定的な障害と思える。

ナモクはタミルノを説得しようとしてきたがタミルノはまったくそれに取り合おうとしなかった。だが、今回タミルノはマセルの同行を条件として話し合いに応じる意向を示した。ナモクはタミルノ懐柔の契機を掴んだと喜ぶ一方で、タミルノが特に挙げたこのマセルというのはいかなる立場で、いったいどういう人物なのだろうかと警戒せずにはいられなかった。

アジヨ派の本拠地は、ちょうど市場を挟んでタミルノたち住人たちの居所と反対側にある。約束の日、タミルノはマセルと連れ立ってナモクのもとを訪ねた。

会談の席にはタミルノとマセル、アジヨ会衆からは統治長ナモクとその腹心イリアエルが座した。ナモクはわざとらしく両腕を広げて歓迎の意を示そうとしたが、マセルはそれを全く意に介さず勝手に席に着くと、いきなり本題に入った。

「まず問う。アジヨというのは何のことか」

イリアエルはちらりとナモクのほうを伺うと、応じて言った。

「アジヨとは、私たちが生前住んでいた場所だ。言っておくが、私たちは何も自分からアジヨと名乗っているのではない。お前たちが勝手に私たちをアジヨ派と呼んでいるだけだ」

「なぜ組織のようなものを作る？」

「会衆を統率せねばなるまい。私たちは長い間ここに暮らしているが、ここでの暮らしぶりはどうだ？ お前ももう知っていると思うが、タミルノたちはただ食べ、飲み、寝、それぞれが思い思い好き勝手に過ごしているだけだ」

「その何が悪い？」

「愚問だ。それが信仰と言えるか？ この世界がどこまで広がっているのか、他の地域に人間はいるのか、本当にここはクルの信徒だけで成り立つ世界なのか……そもそもなぜ俺たちだけが地獄に集められているのか？ 俺たちは、実はいまだに何も分かっていないで

はないか」

ナモクはイリアエルに語らせたまま黙って聞いている。マセルは続けた。

「だからと言って、なぜ統率が必要なのだ？」

「信仰とは何だ。俺たちはクルの意志を知らなければならない。それを自ら求めようもしないなら信仰は形だけではないか？俺たちは試されているのだ。だがお前たちは日々の安寧に甘んじて何も分かつとうとしない。これはお前たちを導くために必要な統治だ」

マセルはこれ以上質問するのをやめ、口元に手を当てて俯いた。これを見てイリアエルも引いた。

おそらく、今イリアエルが言ったことは、すでにナモクとタミルノの間で何度となく交わされた議論のほんの一部に過ぎないであろうとマセルは思った。確かに独善的な感じもするが、しかし一考に値する主張のように感じられた。

むしろマセルは、タミルノがこの主張をまったく顧みなかったとしたら、それはなぜなのか、そのほうが気になった。タミルノは、最初の動機がどうであれ統治は権益を生んで妬みや争いを引き起こし、今の平穏な生活が脅かされると考えているのだろうか。いや……タミルノはそういう人間ではないような気がする。それに、もしそうなら、すでに一部の住人たちを統治しているアジョ会衆の存在をそのままにしておくことがおかしい。マセルはタミルノの心に意識を集中しようとした。そのとき不意にタミルノが言った。

「ナモクよ。これからは俺もその統治に協力しよう」

その場の全員がタミルノの唐突な申し入れに目を見開いた。マセルは反射的にタミルノの心を読み取った。一瞬のことだったので詳しい意図までは分からないが、タミルノが本当にアジヨ派に協力しようと考えていることは確認できた。

ナモクは満面笑顔だった。ナモクはおそらく最初からタミルノの意識の動きに集中していたのであろう、そのためにイリアエルに語らせ自分は黙って伺っていたのだ、とマセルは今になって気が付いた。

「よく言ったタミルノ。これでこの世界の歴史は大きく前進するだろう。そうなれば早速だが……」

タミルノは落ち着いたまま遮って言った。

「いや、今日のところはこれを伝えに來ただけだ。身近な者たちともよく相談しておくから、あらためて訪れるがいい」

タミルノは席を立ててナモク、イリアエルとそれぞれ握手を交わすと、足早に部屋を出た。マセルは一瞥もせずタミルノに続いた。アジヨ派の会所から市場へ続く道を、マセルはタミルノと並んで歩いた。

「いきなりで驚いたよ」

「ああ、別に何も隠していたわけじゃないんだが、まあ、どちらにしろ……マセル、お前はまだここに來たばかりで、様子が何も分からないと思っているだろう。だが、実は俺たちだって状況はほとんど変わらないんだ。まあ暮しには不自由しないが、さっきイリアエ

ルが言ってた通りだ。俺たちはどうして地獄に来たか、そして、ここで何が行われているのか……」

「つまり、これが現世で俺たちの思い描いてたクルへの信仰とどう関わってるのかわかってことが？」

「ああ」

マセルは少し考えてから言った。

「これがクルから与えられた罰なのかもしれない……ここには何の苦痛も、迫害も、死に対する恐怖もない。しかし、クルがいない。クルのお考えが分からないまま、俺たちはここに永遠に留め置かれる。これそのものが罰なんじゃないのか？」

「……そうかもしれない。クルを知る者はみな天にある。俺たち地獄の住人は、永遠にクルを知ることができないというわけか。そうかもしれない」

マセルはまた少し考えてから言った。

「……いずれにしろ、人間の勝手な解釈に過ぎんな」

ふたりはゆっくりと歩き続けた。

「タミルノ。でも、どうして今なんだ？」

「ああ、俺も信仰についてはずっと考えてはいた。しかし、正直言
って、どうしていいか分からなかった。それに、なぜか知らんが俺
には特別な役目がある。その意味をずっと考えていたんだ」

「特別な……ああ、つまり、俺のように地獄に送られてくる人間を
世話するということか」

「だがな、実はマセル。お前が来たとき、奇妙なことが起こった」
「？」

「お前はな、マセル……お前は、おそらく地獄に送られてくる最後
の人間なんだ」

マセルは、言っていることがよく分からなかったのでタミルノの心
を読んだ。

タミルノがこの世界に送られてくる人間たちを、この世界で生活で
きるように世話していることはマセルも知っていたが、それはタミ
ルノに与えられた特別な力が関係しているようだ。つまりタミルノ
だけは、次にいつごろ誰がこの世界に送られてくるかということが
分かるらしい。

「クルのお告げでもあるのか……？」

マセルは不意に口にした。タミルノはそれに答えず、黙って心を読
ませた。

これはお告げのように不定期に啓示されるのではなく、タミルノは
別に意図せずとも当然のように、自分でもいつから知っていたか分

からないほど自然にそれが常に意識に現れているらしい。タミルノはこの力はクルの意志によるものだと思っていた。それはつまりこの任務がクルのご意思であることの証拠だと感じていた。だから現状の生活を大きく乱すことはその意思に背くことかもしれないと考えて、自分の役目を忠実に守ってきた。

だが、マセルがここへ来たときに事情が変わった。それは、マセルが現れた時点で、タミルノの中で「次にいつごろどんな人物がこの世界にやってくる」という意識が消えてしまったからだだった。こんなことは今まで一度もなかったのだ。どんなに遠い時期であれ、タミルノには常にその情報があったのである。しかし、あえて意識して考えようとしても、この次には、どれくらいの間隔を置いて人がこの世界に来るのかというのがタミルノの意識にまったく浮かんでこなくなった。いや、しかしそれはこの力が消えてしまったのではない。

「非常に感覚的なものだが俺には分かる。俺にその力がなくなったんじゃないくて、力を使うべき対象がもういないんだ。もうだれも、ここへはやってこない」

もうこれ以上だれもこの世界にやってこない。つまり、この世界にはもうこれ以上人間は増えない。これこそタミルノがアジヨ派に協力するに至る動機だった。

タミルノがそれを知ったときに受けた戦慄のような、絶望のような感覚をマセルは読み取った。そしてマセルは、この事態からくるタミルノの推測を感じて自らもまた戦慄を覚えずにはいられなかった。つまり、タミルノの感じ方が正しいのだとすると、これが意味することはつまり

「現世が……人間が、滅んだ……?」

いや、これは確かに一つの可能性であり、推測にすぎない。現世の様子まではだれも分からないのだから。二人は黙って歩いた。空は相変わらず日暮れとも夜明けとも取れる色をしていた。

二人がタミルノの家に到着した。だが住人達はいつも通りだった。

「みんなには何と話す？」

マセルは尋ねた。しかしタミルノは

「その必要はない」

と当然のように答えた。考えてみると、皆他人の心が読めるのだから当然に今日の二人の行動は住人たちに知れている。知っていてだれも何も言わなかった。あらためて議論する必要はないということである。

むしろ住人達は皆、タミルノがこの世界に関して積極的な行動に移るのを待っていたのだ。マセルは新参だったので把握していなかったが、これはタミルノと行動を共にしている住人たちの間ではもう共有されていた認識だったようだ。マセルは今さらのように住人たちの心の動きに集中してみた。姿は見えないが親しい者たちの意識ははつきり伝わってきた。皆今の状況をマセル以上に理解していた。そして、そもそも全員がタミルノに賛同していたのだった。

もちろん、この住人たちの動きをナモクも注視していた。ふだんはまるでのほほんと暮らしているかのように見えたのだが、タミルノたちの中にある、ある種の「まとまりの良さ」を見せつけられているような気がした。そして、それはタミルノの並みならぬ統率力によるところが大きい。ナモクには脅威でもあり嫉妬もあった。だが今は統治という大志の前にそんなことに頓着してはいられないと感じ

ていた。

この後地獄の住人達は次々に取り決めを整備し、アジヨ会衆を母体として統治機構を正式に構えた。まずはこの世界の全体を模索すべく把握のための暦と、拠点の配置計画と、組織を調えた。

ナモクはその1代目にして唯一無期限の統治長として正式に指名された。副長にはタミルノが推挙されたがタミルノはこれを固辞し、結局流れてイリアエルが就いた。

このようにして、今この世界の会衆は名実ともに一つになった。住人達は湧き上がった。探索隊の第一陣が出立する。そこには、タミルノ、ヌル、そしてマセルも含まれていた。

クセルの困惑 1

マセルの死から十数年が経過した。マセルの奇策によって生き長らえたクセルたちはバツカノの圧政に従いながらも水面下ではクルへの信仰を絶やさず、それぞれに人生を終えた。

クセルは家族と会衆の者に看取られて眠るように逝った。クセルは天に移され、周りには多くの仲間が取り囲んでクセルの目覚めを待っていた。その中にはクセルが現世で死ぬ時点ではまだ生きているはずの者もいた。

「ここは……天、なのか……？」

クセルが目覚めると、会衆の仲間たちが和やかな笑顔で迎えた。

「クセル。ついに来たか」

「みんな、お前が来るのを待っていたぞ」

クセルは一人ひとり仲間たちの顔を確かめるように見回した。

「お前たち……おお。お前たちは……？ まだ生きているはずでは」

「びっくりしたか？ クセル。俺たちは一足先にこっちに来ていたんだ」

クセルは立ち上がり、一度深く呼吸すると、また皆を見回した。

「どういうことだ。まだ死んでいない者までいるとは。世の終わりが来たのか？」

クセルはそのつもりはなかったのだが、皆クセルがおどけて冗談を言ったのだと思って笑った。

「いやいや、そうではない。まあ、順番が違った、と思えばいい。先に死んだからと言って先に来られるというわけではないようだぞ」

クセルは自分では死んでから何分も経っていないような気がしていたので、すぐには信じがたかったが、今はとにかく会衆の人々と共に天国で復活できた喜びの方が大きかった。

その日はそのまま宴が催され、クセルたちは互いの信仰を讃え合い、大いに酔った。

「私たちが今ここにいるのはマセルのおかげなのだ」

クセルは生前からずっとマセルの犠牲に対する負い目を感じていたので語らずにはいられなかった。そしてだれもが心からそれに共感するに違いないと疑わなかった。しかし、

「お？ 得意のクセル様の説教が始まったな。また聞けるとはありがたい。はっはっは……」

クセルは思わず次の言葉を飲み込んだ。自分が茶化されたことよりも、経緯を知っているはずの会衆の仲間たちが、マセルについて話している相手に対してこのような軽率な態度を取ることに奇妙な不安を感じて一気に酔いがさめてしまった気がした。

すると、そんなクセルの表情を察してか

「はは……まあ、マセルには俺たちだって感謝してる」

「あいつも考えてみれば、大した男だったよ」

と会衆の者たちも口々に言った。しかし、それは余計に芝居じみているように感じられた。

クセルは、眠るとき以外はほとんどいつも会衆の仲間たちに囲まれて過ごした。しかし実はクセルは内心では少なからず警戒していた。

それは一つには、天国では人々は互いの心を読み取ることができるようになるというところからである。そしてクセルはまだこのやり方を会得できていなかった。つまり今は周囲の全員がクセルの考えていることを容易に知ることができるのに対し、クセル自身は相手の心が隠されているという状態にある。一見だれもが心から自由に振舞っているかのように見えるが、来たばかりのクセルにはそれがどこまで信用してよいものか判断する術がなかった。

これは憶測にすぎないが、自分の願望や欲求が周囲のものから見て、況やクルの目から見て万が一否とされたら、それによってどんな裁きが下されないとも限らない。

「そんなことはない。安心しろ、クセル」

親しかった者たちは口々にそうなだめるが、不安は拭いきれなかった。というのも、クセルが警戒する理由がもう一つあったからである。

それはマセルの話をしたときに感じた、つまり会衆の仲間だった者たちにマセルの話をしようとした場面で彼らが一瞬見せた奇妙な反応のことであった。

マセルの死と、それによって信仰を守り得た自分たちの生きた経緯は知っているはずである。クセル自身は生前ずっと葛藤してきたし、

会衆の中でも事あるごとに話してきたのだから、いくら再会の喜びに浮き立ったからと言って、酔っていたと言って、あのような軽々しい言葉が吐けるだろうか。譲って考えて、天国に暮らしているうちに一部の者が何かマセルの行動について否定的な見解を持つに至っているとしても、少なくともあのようにな化し、はぐらかしてよい話題であるはずがない。クセルは、現世では会衆の全員が前提的に抱き共有していたと思っていた、信仰に対する真剣さ、それが、ここではなぜか失われているように見えて怖かった。

クセルはしかし、この気持ちを何とか振り払おうとした。そしてマセルのことは一切語らないようにした。考えることさえ努めて抑えようとした。そして、疑心暗鬼でいることを悟られないように、いや、できればそんな思い自体が消失してしまうことすら願いながら、一見きわめて愉快に、快活に振舞った。

3

クセルが天国へ来てから、おそらく一月以上経っていた。おそらくというのは、ここには正確な日付を表す暦や、時間を示すものがなからであった。クセルたちは食べたくなれば食べ、眠くなれば寝、時間の感覚はあくまで生活の周期と体感に拠っていた。

見る限り天というところは現世とほとんど変わらないように思えた。違うのは空に太陽がなく、ずっと明るく真白であることくらいである。

しかし、現世と勝手が違うのは互いに心が読めるということである。クセルも最初は、自分の意識に浮かび上がってくるものがはたして相手の心なのか、それとも相手の言動や表情から受ける印象にすぎないのか混乱したが、ほどなくして自然に区別できるようになっていった。

相手の心が理解できるようになると、当初の警戒感も次第に薄れてきた。会衆の者たちの信仰心が希薄になっているように感じたのも今は無理からぬことだと納得した。

たとえば会所へ出向いて祈ったり、集会を開いたりというようなクルへの信仰に関する習慣は、少なくともクセルたちが住む一帯ではまったく行われていない。

「天にあって、これ以上クルに何を祈る？」

などとおどけてみせる者たちもいた。もちろんクセルは、やはりふと一人になったときには生前と同じようにクルへの祈りの時間を取

るようには心がけた。しかし、考えてみれば、すでに死んだという事実は明らかなのに天国にいてまた命を得ている時点で「信仰」という意味に大きな変化があつて当然だ。少なくとも天はもはや信じるべきものではなく事実ここにあるのである。

いずれにしろ、クセルは周囲との協調を最優先に考えて行動した。今自分たちはクル教信仰の果実として天での命を得、不自由ない暮らしを楽しむことが許された身なのだ。無用に抗って異論を唱え、いさかいを引き起こす理由などない。

「祈りたければ祈ればいい。我々はそもそも祈りに見返りなど求めてはいないのだから」

クセルはいつの間にか生前そうであつたように、皆を諭すような語り口を取り戻していた。

クセルたちは、いつものように街道の脇にある広場に屯していた。そこへ一人の女が割って入ってきた。

「クセル様」

唐突に声をかけられて振り返ると、女は見たとところ四十過ぎの小奇麗な婦人だったがクセルは見覚えがなかった。

「クセル様にぜひ会ってお話したいという女がおりまして」

「失礼、どこかでお会いしましたか？」

「いいえ。でもクセル様のご様子は前から知っておりました」

「そうでしたか。ここはかなり大きな街ですので私たちのような田舎者は右も左も分からず失礼しております」

「いいえ。そんなことは仰らないでください。私たちはみんなクルの下にあって一つの家族です。ところでこれから少しお付き合いいただけますでしょうか？」

婦人はそういうと返事も聞かず歩き出した。クセルは躊躇したが、仲間たちも笑顔で頷いた。

「みんなは何か知っているのか？」

クセルは事情はよく分からないが、婦人の姿を見失いそうなので慌てて追いかけた。

「みんなは、あなたのことを知っていたようだが」
「ええ」

街道から脇道に入り、石段を降りるとそこからは人が二人並んで歩くのも窮屈だった。クセルは少し距離を置いてついて行った。背後から様子を伺いつつ、クセルは婦人の心をこっそり読もうと試みた。だが、これから行く先の道順以外特に何も読み取れなかった。おそらく婦人はクセルに何も悟られないようにわざと道順のことだけに意識を集中しているのだ。クセルは警戒した。

婦人は一度クセルを振り返ると、そのままある家へ入って行った。この家に来ることだけはクセルにも分かっていた。廊下を通り、婦人に促されたのでクセルは先に部屋に入った。目が慣れないせいで中は薄暗く感じた。部屋の真ん中に複雑な模様の敷物が敷いてあった。そこに女が座ったまま、まっすぐにクセルのほうを見つめていた。人がいると思わなかったのでクセルは少し身じろいだ。

「イラと申します」

崩して座っている女の脚がぼうつと見えた。声からするとイラはちやうど婦人の娘くらいの年頃に思えた。

「私がクセルですが何用でしょうか」

「ええ。わたしの横に来て、お座りください」

クセルは訝って婦人のほうを振り返ったが、婦人はいつの間にかいなくなっていた。

とにかく状況が呑み込めないまま、クセルは言われるままイラに近付き、敷物の上に胡坐をかいた。

「私の横と言ったでしょう？」

イラは膝を崩したままクセルの右にずれると、触れるか触れないほどに寄った。暗さに慣れてイラの姿がはっきり見えた。クセルは狼狽えた。それと同時にイラの心を読もうとしてその顔をまじまじと見た。

瞬間、クセルの意識にイラの心が現れ、それがあまりにも突飛だったのでクセルは胸を強く突き上げられたような衝撃を受け、早打つ脈が全身を走った。

イラの中には、全裸で犯されるイラ自身、縛り上げられ吊るされて責めを受ける、あるいは自ら喜んで前戯に興じるイラ自身、あらゆる妄想があった。なんとその相手は皆クセルだったのである。

クセルは全身が痺れて血管だけが膨張したような感覚を止めることができずにいたが、イラがその右手をそっとクセルの腕にあてて優しくなでた。

「イラ」

クセルは辛うじて言葉を吐いた。すると今までほとんど息をしていなかったのか、急に息苦しさを自覚して何度も深く呼吸を繰り返した。イラが自分に手を当てていることは分かっていた。

ようやく落ち着いてきたので、クセルはイラの手を丁寧に制止して腕から離し、もう一度深く呼吸してから、やっと言った。

「イラ。いったい……私には、状況が分からない。どういう……何を、するつもりだ」

イラは、クセルが落ち着いたのを確かめると今度はクセルの正面にずれて、まるで何事もないかのように嫌みのない笑顔を見せた。クセルは、最初の印象よりイラがもっと若いように感じた。

「何も怖がることはないでしょう？」

「しかし……」

「これは私が望んでお引き受けしている役目なのです」

「役目？ 役目とは何だ？ こんな、こんなことの」

クセルはこれ以上イラの意識を感じることを怖れて目を背けた。

「クセル。あなたが驚くのは分かります。でも、この世界では私たちはもう罪や掟から解放されているのです。あなたが頑なに信じ守ってきたその罪悪感や規律。もうそれは必要ありません」

「そんな、そんなことは」

「いいえ。むしろそれらは信仰の妨げです。クルはすべてを見通して私たちの望むものすべて準備されます。よく思い出して。あなたはわたしの想像が罪だと思っていますね？ でもそれはあなた自身が決めたことです」

「そんなことは」

クセルは混乱していた。

「信仰そのものすら自力で守れるなどと考えてはいけません。あなたが躊躇する気持ちは分かりますが、自分の力や自分の考えを頼って信仰を守ろうとするのですか？」

「……」

「あなたは、あなたの欲するまま手にします。ここは自由です」

「私は、私はそんなことは望んでいない」

「いいえ？ よく思い出して。クセル。でも急ぐことはありません……ちよっと、飲み物を取ってくるわ」

イラはゆっくりと立ち上がると一度部屋を出て行った。クセルはあまりに唐突なイラの話に、とにかく反論しようと考えたが半ば呆然として何も浮かばなかった。もつとも、ここへ来てからクセルは毎晩いろいろ思い巡らせていたが何も整理がついていないのだ。まともには何か言い返せるはずもなかった。

確かにここは生前想像していたような天とは違う。

イラの意識を知り、それはクセルには受け入れがたいもののように思えたが、実は天に來たときからここがそれほど善良で潔癖なところではないということも薄々は感じていた。

周囲の人々の心に、しばしば信じがたい夢想が起ることに気が付いたからであった。一方で、その同じ人々が、みなクルへの忠実な信仰を抱いているのも確かだった。クセルはこれらをどう解釈すればいいのか分からず戸惑っていたのだ。もちろん、それを周囲の人に聞くことも憚られた。

クセルは表面上平然を装って接していた。しかし、おそらく自分が感じていることも周囲の人々は知っているはずで、その上でだれ一人咎めることも、口にするすらなく毎日が過ぎていた。

「その答えをこの女は知っているというのか……？」

クセルはイラの意図がはっきり理解できたわけではなかったが、少なくともイラはこのような自分の疑問に関わる某かを述べているのだと漠然と思った。

「これは私の大好きな茶酒よ。飲んでみて」

クセルは自分の考えに没頭していたので、いつの間にかイラが戻ってきて隣に座っていることに気が付かなかった。

「あなたは、なぜ私をここへ呼んだのだ？ それとも、さっきの婦人がそうするように指図したのか？ なぜあなたは、それを受け入れるのだ……なぜクルは人の悪しき望みを諫めようとしないのだ！」

クセルは今までだれにも聞けずに抑えていたものを吐き出すかのように、次々に問い質した。だがイラはすぐに答えず、もう一度茶酒を勧めた。クセルが動かないのを見ると、イラは

「大丈夫。別に何も入ってないわ」

と言って屈託のない笑顔でクセルを見つめている。クセルは観念したようにそれを一口飲んだ。

「ふふ」

イラは、まるであらかじめ分かっていたかのようにクセルの支離滅裂な質問に逐一丁寧に答えてくれた。必ずしも納得したわけではないが、クセルはイラのそのような態度に好感を抱いた。

イラの言うところによると、天に來た人は、しばらくするとみなイラのような者に会う。広場で婦人がクセルに声をかけたとき、だれも止めようとせず黙って見送ったのは、その婦人が引き合わせの者

だと知っていたからだ。

このような役目の者は男女それぞれ何人もいて、天に來た者は必ず引合わされることになる。またクセルのようにそれが男である場合には、たいていその者が天で最初に関係を持つ者となる。イラ自身、すでに無数の男と関係を持っていることを臆面もなく語った。

天においてはもはや何の罪も掟もあり得ず、人々は意のままにどんな願望も欲求も叶えることができるはずだとイラは言った。それはもちろん性的なものでも、非社会的なものでも。現世においてあらゆる宗教が罪と定めているような行為もすべて。

「にわかには信じがたい。……しかし、あなたの言うことが間違いだとも、今の私には分からない。とにかく私はまだ何も知らないんだ」

「ええ。そうでしょうね」

クセルはいつの間にかイラに心を許していることに気が付いた。それにイラは若く美しかった。

「長居してしまった。少し考えてみる。その……あらためて話を聞きに来てもよいかな？」

「もちろん。また逢いましょう。私はいつでもここにいるわ」

数日ほどたったと思われる日、自らイラのもとを訪れたときクセルはイラと関係した。

クセルは人目を憚ることなく足繁くイラの家に通うようになった。仲間たちに聞いたところ、皆同様に思い思いの相手と交わっていることが分かった。クセルは大いに安心した。だんだん遠慮がなくなり、いつかクセルはただイラの体を貪るためだけに訪れるようになった。

クセルはいつものようにイラで存分に自分の欲求を満たした後、ふと思い付いて尋ねた。

「イラ。お前はなぜこのようなことを引き受けるのだ？」

「私は私の望みに従っているだけです。クセル。あなたもそうでしょう？　それでいいのです」

結局、クセルの疑問は時とともに薄れつつあった。というよりクセルはいつの間にかそんなことはどうでもよくなっていた。

天で人はすべての罪から解放されており、そもそもそれが罪に当たるか、クルの意思に反するかなどと都度意識する必要すらなく食べたいものを食べ、得たいものを得、満たしたいものを満たし、自分の好むものを愛した。たとえば自分に好ましいと思う異性を誘惑して拒絶されることはなく、また他人を虐げたい貶めたいというような衝動を抱く者にはそれに適う人物が現れた。人々はこれもクルのご意思によって調和が生じている結果だと考えた。

クセルもイラと関係を持ってからこのような行為に罪悪感を抱くことは少なくなっていた。他の者と同様、クセルの行為はより倒錯的になりエスカレートした。だがイラはクセルがどんな欲望を抱い

てもそれを受け入れた。また、クセルがイラ以外の者と関係することも咎めなかったばかりか、むしろそれを助けた。

このようにして人々は食べたいものを食べ、得たいものを得、満たしたいものを満たし、自分の好むものを愛した。

リギルの希望 1

リギルが死んで天国に移されたのはクセルたちよりもずっと後のことである。天にはリギルの妻もすでにいて、クセルたちは遠慮して妻が一人リギルを迎えた。リギルは妻に手を握られて目覚めたので最初、現世に生き返ったかと錯覚した。

ようやく状況が分かると、リギルはマセルのことを尋ねた。

「……マセルは、いないわ」

妻は少し目を逸らして静かに答えた。一瞬沈黙があった。妻は思い出したようにまた笑顔になって言った。

「でもみんな待っていたのよ。クセルたちがあなたに会いたがっているわ」

「そうか。では今すぐにクセルたちのところに行こう。どこにいる？」

リギルはすぐに会衆の仲間たちに会いに行った。最初は再会を喜んでいたが、話しているうちにリギルは激昂して言い争いになった。それはクセルたちのここでの素行に驚愕しただけではなく、それがマセルの犠牲に拠っているということがどうしても受け入れがたかったからだ。

クセルたちは一応リギルのための祝いの席を設けていたが、この様子では宴どころではない。妻がリギルを必死になだめて連れて帰った。

「予想はしていたが……リギルも相変わらずの分からず屋だ」

クセルが呆れた。

リギルは妻に向かって矢継ぎ早に質問した。妻も最初は笑顔だったが次第に辟易して

「ここは前とは違うのよ！ 私だってもう昔の私じゃない。しつこくしないで！」

と突き放して言った。リギルは呆然となって妻の顔を見つめた。少し泣いているようだった。

「……すまない。俺はこれからどうすればいい……？」

リギルはすっかり困惑して力なく尋ねた。

「じきに引き合わせの人が来るわ。聞きたいなら、そこで聞くといいわ」

その時、まるで待っていたかのように、婦人が訪ねてきた。四十過ぎの小奇麗な、それはクセルをイラに引き合わせたのと同じ婦人だった。

「リギル様、ぜひお会いしたいという女がおりますので、少しお付き合いいただけないでしょうか？」

リギルは状況がよく分からないので妻の顔を見た。

「心配ないわ。行ってらっしゃい、あなた」

妻がそっけない表情で促した。

「妻は、あなたのことを知っていたようだが」

「ええ」

街道から脇道に入り、石段を降りると狭い路地が続いていた。婦人がほとんど先を行くので、大した話もできないままりギルはついて行った。婦人は一度リギルを振り返ると、路地に面して並んでいる一軒の家に入った。後について行ったりギルが婦人に促されるまま薄暗い部屋に入った。

「イラと申します」

中には女が座っていて、いきなりリギルに言った。リギルは驚いて思わずたじろいだが、咄嗟に

「いったい何だ！ 説明もなく連れてきて、いきなり失礼ではないか」

と声を荒げた。婦人に詰め寄ろうとして振り返ったのだが、婦人はいつの間にかいなくなっていた。

「突然でご不安でしょう。どうかお許しください」

イラは丁重な物言いで頭を下げて言った。イラは複雑な模様のある敷物の上に膝を崩して座って、頭を下げたままじっとしていた。リギルは、相手がまだ歳若い娘のようなので怒りの矛先を失った。

「いや……もう頭を上げてください。イラと言ったか？ 俺のほう

こそ少し気が立っていたようだ。だが実際まだここに来たばかりで、本当に何も分からないのだ。いったいここはどういうところなんだ。なぜ俺を呼んだ」

「突然で驚くのは当然です。でもあなたの場合は少し急いだ方がいいかと思ったので。いろいろ聞きたいこともおありでしょう？」

「だから、なぜそんなことをあなたが知っているのだ。そして、なぜ俺にかまう。妻に頼まれたのか？」

「いいえ。これはわたしの役目だからです。まずこちらにお座りになつてください……ちよつと、飲み物を取ってくるわ」

リギルはとにかく一度落ち着いた方がいいと考えて、イラの言う通り敷物の上に腰を下ろして胡坐をかいた。しばらくすると、イラが飲み物に乗せた茶盆を両手で持って現れた。短めの裾から素足がのぞいていた。

「これは私の大好きな茶酒よ。飲んでみて」

イラはリギルの右に膝を崩して座り、茶酒を注いでリギルに手渡した。暗さに慣れてイラの姿がはっきり見えた。最初の印象よりかなり若いように思えた。リギルはいきなり初対面の若い娘と二人きりでいるので少し警戒した。

「イラ。いったい……分かるように説明してほしい」

だがイラはすぐに答えず、もう一度茶酒を勧めたのでリギルはそれを一口飲んだ。

「ふふ」

その後イラは、まるであらかじめ分かっていたかのようにリギルに

説明した。天においてはもはや何の罪も掟もあり得ず、人々は意のままにどんな願望も欲求も叶えることができること。天に来ると人はみなイラのような者に引き合わされ、たいていその者が天で最初に関係を持つ者となることなど。

しかし、リギルには到底信じがたい話であった。イラ自身がすでに無数の男とあらゆる経験を持っていると聞いてもまったく想像できなかった。むしろイラは風貌も物腰もまるで処女のように穢れなく、美しく思えた。リギルはいつの間にかイラに心を許していた。

「長居してしまった。あなたとは後日あらためて話したいのだが、よいだろうか？」

「もちろん。また逢いましょう」

リギルはそれを聞いてなぜか少し浮き立っている自分に気が付いて、恥ずかしくなった。

「ありがとう……その、いろいろ案じてくれて」

「いいのよ。少し待って。奥さまのところまで送って行きましょう」

「いや、それではあまりに……」

「気にしないで。まだ道に詳しくないでしょう。途中で、場所が分かるところまで行ったら、私は引き返すわ」

リギルは、なぜかイラと妻が会うことを警戒したのだが、イラはそんなリギルの心を察して言った。

イラと並んで歩いていると、すれ違う人がちらり、ちらりとこちらを伺っているように思えた。だがイラはまったく意に介さない様子なので、リギルも平然を装って歩いた。空は真っ白のままであった。

「ずいぶん長居してしまったと思うが、いったい今何時頃なんだ？」
「ふふ。天国には昼も夜もないのよ。この人たちはだれも、時間なんて気にしてないわ。遠くの、もっと大きな都に行けば時計を使っている場所もあるけど」

「そうか……なぜ笑う？」

「最初みんな同じ質問をするからよ」

「ああ、そうだろうな」

「ここは見たところ、生きてたときと変わらない世界のように見えるが、何というか……何かが違うという感じもする」

「でしょうね……奥さまのことを言ってるのね？」

「いや、それだけではないが。何となく……そんな感じだ」

「一番違うところを教えてあげましょうか？ そのうち分かるけど、実は、天国ではみんな他人が今何を考えてるか分かってしまうのよ」

「何を……え？ 本当か！」

「そうよ。あなたが考えてること、私には全部わかってるのよ」

リギルは俄かに信じがたかったので、イラを試して言った。

「本当なら、では今俺が何を考えているか、当ててみてくれ」

「ふふ。いいわよ……数字の『2』、でしょ？ それに、『まさか

そんなことがあるはずがない』って思ってる」

リギルは驚いて、何と言っているのか思い付かず黙ってイラの顔を見ていた。

「私って、やっぱり思ったより若いな、って今思ったでしょ」

「……あ、ああ」

「それなのに、たくさん男たちに弄ばれて……気の毒だと思ってたでしょ」

「いや、そんな……いや、すまない」

「あなたを呼びに来たあの婦人は私の母ではないわ。それに、別に私はあの人に言われてやっているわけでもないのよ」

こうまで自分の考えていることを言葉にされるともう疑う余地がなかった。そして、最初から自分の思いがイラに読まれていたのだと気が付いて、イラに申し訳ないような気持ちになった。

「ふふ。いいのよ。もう慣れてるわ」

「……すまないな」

「それより、あなたも人の気持ちが読めるようになるのよ。しばらくすれば自然に分かると思うけど、よかったら私がやり方を教えてあげましょうか？　だからまた私のところにいらっしゃいよ」

歩いているうちにリギルにも分かる場所に来ていた。

「それじゃ、あそこが奥様の家よ、分かる？」

「ああ。ありがとう……また、近いうちにまた行くが、いいかな？」

「もちろん。いつでもいいわ。待っているから」

イラは立ち止まると、もう一度リギルの顔を見て微笑んだ。そのま

ま振り返ると、もと来た道を駆け出した。リギルはイラの背中に向かって声をかけた。

「イラ！　ありがとう！」

イラはそのまま駆けて行った。

リギルは、できればまだ妻に会いたくないような気持だった。だがあまりうるついても変なので、一つ角を曲がってすぐ脇にあった休息所のようなところを見つけて腰を下ろした。

イラが言うように、相手の考えが分かるならいったい何が起こるだろうか？ 少し想像してみたがリギルには見当がつかなかった。

「まあ、嘘はつけないくなるな……」

それくらいのことであつた。仮に自分だけが他人の心を読むことができるのならまだしも、全員が互いに分かっているものでは特にたいた意味があるとも思えない。まして現世ならともかく、ここは天国なのだ。人を騙したり出し抜いたりする必要そのものがない。

「いや、待てよ？」

こう考えるのは、この天国が自分の考えている通りの天国だった場合の話だ。クセルたちやイラに聞いたところを合わせて考えると、とにかくここはそもそも自分が生前想像していた天国とは似て非なる世界であろうことは間違いない。

天国に来た人々は最初、天に住む人々が貪る限りのない快楽に戸惑う。それは墮落であり罪であると感じる。しかしそれは、現世での倫理や規範、死を絶対的な前提としている人間の思考を通して見るからそうなのであって、天にはそもそも罪も墮落も存在しない。天の人々はまさに永遠の命と無限の欲望の充足をクルによって授かったのだとイラは言った。

「本当だろうか……？」

確かに理が通っているような印象も受けたが……しかし、何の保証があつてそんな解釈がまかり通るのか。クルの十言にそんなことを示唆するような言葉はまったくくないではないか。

「人間の解釈ではないか……」

リギルは生前から繰り返した言葉を思い出した。

「人間の解釈」

それは会衆でこのような議論が起るときにいつも言われたことであつた。何を言おうと信じようと、結局はすべてわれわれ人間が勝手にこしらえた解釈に過ぎない。クルの意思はクルしか知らない。だからこそ我々は自由なのだ。

今この天において何をしようと、だれもそれがクルのご意思だなどと断定できるはずはない。快樂も墮落も、勝手にすればいい。それがだれの意思であろうと関係ない。俺は俺の信義に従って生きるだけだ。この天でも。マセル……

「マセル……」

リギルは泣きたいような気持ちになった。夜のこない真っ白な空から逃れるためにリギルは目を閉じて両手で顔を覆い、いつまでもじつと動かないでいた。

どれくらい時間が経ったか分からなかった。リギルはふと我に返り、立ち上がってとぼとぼと歩き出した。妻の家にはない。向かう先はイラのところだった。

おそらく妻やクセルたちとまた会って議論したところで同じ結果になるだけだろうと思った。それよりもまず相手の心が読めるようになることが先決だろう。そうすればもっと露骨に人々の考えを知ることができる。何かを判断するのはそれからでも遅くはない。

自分にはまだ情報が少なすぎる。イラにはまだいろいろ聞きたいこともある。リギルにとつて、ここに来て最も信頼のおける人間は、妻や会衆の仲間たちではなかった。

それほど時間もたっていないというのにまた来てしまっただけは変に思われないだろうかと思いつく巡らせながら、リギルはゆっくりと歩いた。イラの家の前に辿りつくとき少し躊躇したが、他にどうしようもないと感じて入った。廊下に進んで一度

「イラ」

と声をかけたが返事はない。そのまま部屋を覗き込むとイラが最初と同じように膝を崩して座っていたので狼狽えた。

「リギル。どうぞ」

イラはにっこりと微笑んでゆっくりした口調でリギルを誘った。

「私の横に座って」

リギルは敷物の端のほうに胡坐で座った。

「私の横と言ったでしょう？」

イラは膝を崩したままリギルの脇にずれると、触れるか触れないほどに寄り添うようにして言った。

「体の力を抜いて。リギル、まだ何もしないわ。安心して」

リギルは少し警戒したがそれよりもたくさんの複雑な感情に縛られているような気がして、拒む気力も起きなかった。イラはいつの間にかぴったりと体をリギルに寄せていた。

「イラ。私はどうしていいか分からない。どうすればいいか……」
「眠いのよ」

リギルは、そう言えば、感情が混乱していると感じていたのはよく考えると眠気が襲っているからだと思った。目を閉じると一気に意識が遠のくような感覚に襲われた。リギルは眠ってしまった。

どれくらい後か分からないが、目が覚めるとリギルははっとして部屋の中を見回した。イラの姿がないのでしばらく茫然としていた。

「リギル」

イラの声がして、姿を現したイラは前よりも艶のない無柄のさっぱりした服を着て現れた。

「久しぶりに料理を作ってみたけど、食べる？」

リギルは、そう言えば何も食べていなかったと思った。しかし、別段空腹を感じてもいなかった。だがイラの好意に応えようと

「ああ、ありがとう」

と答えた。イラの後について別の部屋に入ると、食卓があって、すでに大小の皿が並んでいた。前の部屋と違って、大きな窓から外の光が十分に差し込み、明るかった。リギルの好みに合わせられるように、イラは多様な料理を用意していた。

「お世辞を言ってもだめよ。分かっちゃうんだから」

その通りだと思ったのでリギルは口に合うものを気の向くままに食べた。

食事の後、二人は最初の部屋に戻って向かい合って座り、茶酒を飲みながら長い間話した。

イラの説では、天国では本当に加害的な行為や実行不能な欲望は予め抑えられている。だから、そもそも人は実現不可能な望みは抱くことはおろか想起することすらできない。人々はこれをクルによる調整だと考えている。しかし、リギルは納得しなかった。

「それは本当に人々が望んでいることなのか。それでは己の欲望も本当に欲しているかどうか疑わしいではないか」

「リギル。あなたが言っている人々って、たとえばだれ？」

リギルは思わずクセルの名を挙げようとしたが躊躇した。そして、じっと考えると、何かに踊らされているように見えて実は最初からクセル自身が望む通りのことが起こっているだけなのではないかという気もしてきた。

「クルの力によって調整されていることと、クルを信仰して従おうとすることと、何が違うの？ 自分の選択で生きたい？ みんな自分で選択して生きているんじゃない。現世でも、ここでも。そうじゃない？」

「そうかもしれない。だが何だか腑に落ちない話だ」

「ねえ。現世でよく言われたことだけど、何の制限もなく己自身の意思で生きるべきだと人間に向かって言うのはだれ？」

「それは……神ではない。それは……悪魔だ」

「もちろんクル教には悪魔なんて教義はない。でも思い出してみて？ 私たちが現世で生きているとき、多くの人が悪魔とか悪霊とか

呼んでいたものの正体が実はなんであつたか」

イラを遮ってリギルは言った。

「なぜあなたはそんなことまで言えるのか。なぜそんなことが断定できるのか！ あなたはいったい……」

「いいえ。ただ私はあなたの疑問に答えたいと願っているだけ。すると何を言うべきかが自然に出てくるような気がするの」

リギルは何度も試みたが、いくらやってもイラに反論できそうになかった。そうするうちにイラの言っていることのほうがだんだん実しやかに思えてきた。ただそれを頑なに拒もうとする自身の感情に流されて不毛な問いを繰り返している。リギルは自分が滑稽に思えてきた。

煮詰まった感覚を察してイラが席を立った。茶酒を入れ直して戻ると、イラは今度はリギルのすぐ横に寄り添うようにして座った。リギルは、イラと体が少しだけ触れ合うことを最初ほど意識しなくなっていた。

「私の話をしている？ ……私は、こう見えても生きていたときは純真な娘だったのよ。私たちの会衆に新しい信仰の人たちがどんどん加わっていた。でも、その中に、本当はクル教など信じていない異教の男たちが紛れていて、会衆の女を次々に犯して行ったのよ」

リギルは、イラの顔をじっと見た。かける言葉がなかった。

「最初、女たちは抵抗できずにいた。恐かったからよ。公にすればどんな報復があるか分からないし。何よりも、もしそのことで自分が会衆の中で孤立してしまったら。恐くてみんな黙っていた」

「でもだんだんそういう噂が広まって。信じない人もいたけど、若い娘や妻を持つ家は警戒するようになった。でも無駄だった……殺されたのよ。私の父と母は。私が犯されそうになったとき、抵抗して声を上げた私に気が付いて、助けようとした。それを、男たちが何度も殴って、押さえつけて床に頭を何度も打ち付けて殺した」

「私は絶望した。私は父が持っていた短剣で、自分の胸を突いて死んだわ。私は自殺したのよ」

イラは終始落ち着いた様子で淡々と話していたが、リギルは胸が熱くなった。同時に、強い怒りのような感情が沸き起こった。

「それならばなぜ！　なぜあなたはこんなことをしているのだ！」

リギルが声を荒げててもイラは驚く様子もなく、リギルから離れようとしなかった。

「これは私が望んでいることです。たとえば、もし私が本当に望めば今すぐ父と母のもとに戻り、ずっと一緒に暮らすこともできるでしょう。しかし私はそれを望んでいないの。私はこの暮らしが好きなの……」

「だから！　それも調整のせいかもしれないじゃないか！」

リギルはイラの言葉を遮って、イラを強く抱きしめた。それは欲情というような気持ちではなく、イラの深い絶望を自分も受け止めようとするような悲しい感覚だった。イラにはリギルのその心の動きが読み取れた。しかし、リギルはそれがまだできない。少しの間、二人はそのまま動かなかった。

「リギル……良かったら、しばらくここにいて」

リギルはそれが誘惑なのか、情なのか、それとも役目を遂行しているだけなのか判断できなかった。

「せめて、人の心が読めるようになるまで、私といっしょにいるのがいいと思うわ」

リギルは回していた腕をほどき、ゆっくりと頷いて笑った。それを見てイラも同じようにゆっくりと頷いた。もちろん最初会った時からイラが若く美しいことは分かっていたが、何というかりギルは初めてそれを意識してついイラの全身をまじまじと見た。

「どうしたの？ 恥ずかしいわ」

「いや、そんなつもりでは……」

リギルが狼狽えるとイラは悪戯っぽく笑った。

「ふふ。分かっています」

二人はまた笑った。

リギルはそのままイラの家に行った。イラは心を読むやり方を丁寧に教えた。そうしながらイラは少しずつ自分のことをリギルに伝えようとした。もちろんイラのほうは、天で目覚めてから今までのリギルの心の動きはすべて見て取れた。イラは、リギルの心の変化に気を配りながら、リギルが怯えないように自分の思考を常にコントロールしながら慎重に慎重に自分の心を開いていった。

おかげでリギルは多くの人々が自然にそれを習得するよりもかなり早くそれを会得することができ、その頃にはリギルとイラは、思いつくこともなかったのに突然再開した昔の恋人のように互いを深く知り合っていた。

イラはリギルには、クセルや他の男たちに見せたような激しい欲情は見せなかった。見せないというより、なぜかリギルに対してそういう感情、つまり、襲いかかるような性的願望を抱くことがなかった。イラはいつもそれを見せつけることで男たちを虜に思うままにそれを満たしてきたのだ。しかしリギルと相對したとき、いつものような激しい劣情に身を委ねたいという衝動が全然起こらなかった。イラは少し戸惑っていた。リギルに対して抱いている感情が、ごくふつう異性に感じる情愛や親密さという類の感情だということに、まだ思い至らなかった。だがイラは自分の信じるころ、つまり素直に自分の気持ちの赴くところを行うという自分の習慣に従ってリギルに接した。

リギルはイラの心がずいぶん分かってきたのと同時に、今度は妻やクセルたち会衆の仲間たちの心を探り始めた。初めは、ある程度落ち着いたら妻のところに戻り、会って直接話そうと考えていたが、

その気持ちはかなり薄れていた。妻の心が分かってみると、その中にリギルのことがほとんど現れないことに気が付いたからであった。考えてみればそれは生前からずっとそうだったのではないかと感じた。そしてリギル自身も、もはや妻やクセルたちにほとんど関心がなかった。

リギルは天において、生前の人間関係にはもはや捉われたくないと決心した。イラは、万事がそうであるように

「あなたの望むようにすべきだわ」

とだけ言った。だが、リギルにとってそれは、イラと共にいる、という意味ではなかった。クセルは旅に出ようと考えていた。

「イラ。少し考えていたのだが」

「そう……」

「うん。あなたは、ここでは本心から望んでいることは何でも叶えられるはずだと言ったな。どんな望みでもいいなら俺はマセルに会いたい」

言いながら、リギルは当然それは不可能だと思っていた。しかし意外にもイラは

「望むなら、叶うでしょう」

と告げた。リギルが自分のものを発とうとしていることを察してイラは居たたまれない気持ちになったが、一緒に行きたい、とは思わなかった。

「イラ。俺はきつとまた戻ってくる」

「私はいつでもここにいるわ」

「ああ……一つだけ願がある。聞いてくれるか？」

「分かるわ、リギル。でも私は私の心に従うだけよ」

リギルとイラはきつく互いを抱きしめた。リギルは旅立った。

ナトカの家 1

イラの話では、街道伝いに行けばいずれもっと大きな都市に出るということだった。ただ、歩いていくには途方もない距離なので乗り物を調達したほうがいいとイラは勧めた。しかしリギルはむしろ自分の足で歩いてみたいのだと断った。

長旅のつもりだがリギルは意外に軽装だった。気候が変わる心配もないし、天では特に何も食べなくても飢えることはない。それに、そもそも天にいるのは全員がクルの教徒であり、現世でありがちな心配もほとんど無用だろう。しかし、リギルは少しだけ刃の長い片手用の短剣をイラに所望し、あとは小物と水を入れた袋を携行した。

町を出てしばらくすると人とすれ違うこともなくなった。街道は初めのうち何度か大きな分岐があった。それに、そもそも街道といってもそれはかろうじて「道」であることが分かるという程度のものであり、仮にその道から多少外れて進んだとしても、障害物はおろか視界を遮るものもほとんどないので、必ずしも街道に沿って歩く必要すらないかもしれない。が、リギルはイラから聞いたところを頼りに街道をできるだけまっすぐ進むことにした。

振り返るとかなり長い間もとの町が見えていたのだが、それもだんだんと小さくなり、ついには目を凝らしてもあるのかないのか分からないほどになった。あとは自分の前にも後にもまっすぐな一本道と真っ白な空だけが目の届く限り続いているだけだった。

リギルは、まるで何もない道の上でしばらく座り込んで休憩したり、仮眠したりを繰り返しながらひたすら進んだ。あまりにも殺風景だったのでどれほど進んだのか、それどころかそもそも自分がどちら

から来てどちらに向かっているのか、感覚が麻痺するように思えた。まるで広い世界に自分しか存在しないような錯覚に陥りそうになる。その度にリギルはイラのことを思った。

実は、遠く離れてもリギルはイラと心を読み合うことで互いの様子を知ることができた。また、タイミングよく二人が同時に相手のことを思うなら、まるで会話しているかのように意思の疎通も可能だった。ので、リギルは完全に孤独という訳ではなかった。ただ、イラはリギルの体に寄り添ったり手で触れたりすることができないことを時折嘆いた。それは、いつも感じるような性的な興奮を伴う情欲とはまったく違う新鮮な切なさであった。そしてその心の動きはリギルにもはつきり伝わった。

「何か見える」

リギルは思わずイラに話しかけるように呟いた。しかし、この時イラは出かけていて、リギルの心に集中していなかった。ので伝わらないようだった。リギルは街道のずっと先のほうにぼんやりと家屋のようなものが見えることに気が付いて、思わず足取りを速めた。

建っているのはおそらく一族ほどが住むような小さな家が一軒だけだ。周囲には木立があるように見える。おそらく庭だろう。リギルは少しずつ露わになってくるその様子に注目しながらずんずん進んだ。しかし、はっと気が付くとその家のもっとずっと先、さらに遠方にうっすらと土色の塊のようなものがあつた。それはおそらく密集した建物、街だ。

視界に入っただけとはいえ、リギルがその家に辿りつくにはさらに途方もない距離を歩かねばならなかった。しかしリギルはもう無心で休みなく歩き続けた。

ついにその家のそばまで辿りついた。そこで街道は右、左、そして中央へと大きく分岐していた。中央をそのまま真っすぐ行けば、おそらく街まで行けるだろう。リギルは一度ぐるりと周囲を見渡した。左右の道の先には何一つ見えない。

家には入り口の扉がなかった。

「だれか」

リギルは入り口から少し離れたところで声をかけてみた。

「……だれかいらっしゃるか」

リギルは少し待ってみたが、だれも出てくる様子なかった。仕方なく入り口から覗き込むと中には一段高くなったところにすぐ一間あり、その奥にも部屋があるようだった。

返事はないが、奥の部屋で人の気配があった。よく聞くと、女のうめきとも叫びとも取れる声が断続的に聞こえた。リギルは咄嗟にまじりと感じて、いったん家の外に退散した。そうかと言ってすぐに立ち去る気もしなかった。リギルはその家の脇から回って木陰に据えられた台座のようなところに腰かけて、持っていた残りわずかな水を飲みほした。

もといた町からどれくらい歩いてきたのだろうか。途中何度か眠ったことを考えると、とんでもなく離れてしまったような気がする。そもそも天に集められた人々が、これほど離れて暮らす意味があるのだろうか？ いや、しかしイラが言っていたように、ふつうは移動の人が乗ることのできる車を使うなら、思っているほど遠いということもないのかもしれない。

ふとイラのことを思いだしてリギルはイラの心を探ってみた。イラも今リギルの様子を知ろうとこちらを伺っているようだった。

「イラ……イラ……」

リギルは、こちらがイラのことを考えているということを伝えるために、心の中でイラの名を何度か呼んだ。

「リギル……聞こえる？」

イラはリギルに話しかけるようにそう思い浮かべた。

「聞こえている……もうすぐ街に辿りつく。私は今街道沿いにある家の庭で休んでいる」

「そう……ふふ。少し取り乱しているようよ。リギル」

「……いや、ごまかしても無駄だな。家の主人は今あの最中だったんで、こうして一人で待っているわけだ。可笑しいか？」

「いいえ。リギル。そこからまっすぐ行った大きな街が、私の天での故郷よ。私は目覚めてから長い間そこにいました。私の両親と、私の会衆にいた何人かの人と。その街は、天では『色欲の町』と呼ばれているわ」

リギルは複雑な気持ちがした。嫉妬か、憎悪か、それと、願望や妄想の入り混じった嫌悪感。その心はリギル自身もすぐに言葉に表せないが、イラにはそのまま伝わってしまう。

「そんなに恐れることはないわ。あなたの望むままに。それに、リギルが何を思っても、何をして私にきつと驚かないわ」

リギルは、ほとんど自覚もなく、言葉にすれば「愛している」としか言い表せないようなイラに対する感情を心に浮かべた。イラはそれを感じて一人微笑んだ。

「おい客人。待たせて悪かったな」

唐突に声をかけられてリギルは驚いた。家の主は恰幅の良い年配の男で、頭髮はなく水夫のような腰巻を着け、上半身は肌の透けて見える白く袖のない下着のようなものだけで、どっぷりと腹が出ていた。

「俺はナトカと言う。お前さんは？」

「リギルだ。旅をしている」

リギルはナトカの風貌を見て嫌悪と警戒の色を浮かべて答えた。しかし、ナトカはまったく意に介さず、

「あんた、どうやって来た？ 馬機はないのか？」

「馬機とは移動用の車のことか？ いや、俺はずっと歩いてきた」

それを聞くとナトカは豪快に笑った。

「はっははははは。そうかい。たまにそういう奴が通る。あんたも、信仰を見つめる旅かい？」

馬鹿にされているような気がしてリギルは苛立った。それを察したナトカは、それでもまだ笑いながら言った。

「いや、悪い。でも、あながち間違っちゃいないんだろう？」

リギルも、考えてみればそうだと感じて

「そう言われれば、そんなところだ」

と応じた。

「まあとにかく入ってくれ。せっかく来たんだ。飯でも出そう。それとも一杯やるかい？」

家になるとナトカは奥の方から引っぱり出してきた広い卓を部屋の真ん中に乱暴に置いた。後に続いてナトカの風貌と似つかわしくない華奢な女が背もたれの付いた椅子を運んできた。

「どうぞ」

リギルはおそらく心を読まれると考えて、あえて何も想像しないように注意した。それなのに、女は自ら言った。

「先ほどは、失礼いたしました。声が聞こえてはいたのですけれど……お待たせしてしまつて」

ナトカはまた豪快に笑つて言った。

「そんなにびつくりすることないだろう？ あんたにや悪かったが途中でやめるわけにもいかないんでな。分かるだろう？」

なんて下衆な男かとリギルは内心軽蔑を隠せなかった。

「よう！ 下衆で悪かったな！ あんたこそ、そんな神妙な顔しても何も始まらねえぜ。あんたが何をどう悩もうと勝手だがよ？ それと、先に断わっておくが、言いたいことは口で言ってくれ。俺は

もう面倒だからいちいち人の心持ちを読んだりする気はねえからよ」
女が濃い色の付いた酒を運んで、卓に置いた。この女はナトカの妻
だろうか？ ナトカとはまるつきり逆で、口調も物腰も優雅で繊細、
華奢な体つきと相まってひどく艶を感じさせた。リギルは不思議に
思った。

「お酒は好きですか？ 良かったら、付き合ってあげてください」

「そうかい……まあ時間はたっぷりあるんだ。納得いくまで流離いの旅つてのも、またいいかもな」

リギルの事情を聞いて、ナトカは少し神妙な顔で言った。ナトカの話聞いているうちに、リギルは最初の印象よりもこの男が非常に思慮深く、どちらかというと理知的な人間のようにも思えた。しかし、それにしてもこの風貌で、あの女とは釣り合いが取れないだろう……

するとナトカは急に凄みを聞かせて言った。

「おい。確かに心は読まないと言ったが、あんた、俺が若い女に溺れたただのバカだって思ってたんだろ？」

リギルは慌てて弁解した。

「いや……実を言うと最初はあんたのこと、嫌な奴だって思ったよ。何というか……はつきり言えば、あんたは欲望に任せて自堕落な暮らしをしている人間たちの一人だと思いこんでしまっ……すまない」

嘘をつく訳にもいかず、苦し紛れの謝罪をしようとするリギルを見てナトカはまた豪快に笑った。

「冗談だよ。まあ、たぶん誰だってそう思うだろうな。だってその通りなんだから。はっははは」

リギルは思わずナトカの心を読んだ。本当に冗談のようだ。少しきついが、これがナトカという男一流の冗談なのだと分かって、リギルは安心した。同時に、この男もクルを信仰して天に生きる者なのだ。風貌に気を取られてはいけない、と反省した。

「ナトカ。あんたはもうどれくらい天にいるんだ？」

「またその質問か……たいてい、天に来たばかりの奴はその質問をする。でもそりゃ、はっきり言って答えにくい質問だ。なんせ、時間なんてそのうち気にしなくなるからよ……それで俺の場合はこう答えることにしている。天国にいる人間は2種類いてな、どれくらいここにいてるかかってことをまだ気にしてる奴と、そんなことはもう気にもなくなっちゃった奴」

「ふーん……つまり恐ろしく長い時間ってことだな」

「まあ、現世の感覚で言えばそういうことになるだろうな」

「なあナトカ。聞いてもいいか？　俺はどうしても天国に生きている奴らが許せない気がした」

「ふーん？　そりゃまたどうしてだ？」

「俺の生涯の友達は、俺たち会衆を助けるために一人犠牲になって死んだ。そもそも俺たちは、会衆の仲間としてあいつに何もしてやれなかったように思う。あいつは……マセルは、妻も子も亡くしてずっと一人ぼっちだったのに。なのにあいつは、いつものように静かに、一人で自分の道を決めて俺たちのために先に逝ったんだ。それなのに、俺たちはみんな天国に来て、当のマセルだけがここにいる。地獄というものがあるのか分からないが、本当ならマセルこそ一番に天国に入るべき人間だと思うんだ」

ナトカは黙って聞いていた。

「でも、ここへ来て何となく分かったんだよ。マセルは……たぶんマセルが望んでいた天国はこんなところじゃない。あいつは、きっとここに来ないほうがいい。悲しいがそんな気がするんだ。それなのに俺たちは……いや、イラの言うことも分かる気がする。でも俺はどうしても納得いかないんだ！ ナトカ。あんたもクルの信仰者だったんだろ？ 俺たちが望んだ天国はこんなところだったのか？ 俺たちがいつこんな世界に連れて行ってくれと頼んだ？ これが本当に……本当にクルのご意思なのか」

ナトカは何も言わなかった。ただ、いつになく優しい笑みを浮かべて、同情するようにリギルを見つめていた。

「……つい苛立ってしまった。俺はどうもそういうところがある。すぐ感情的になって、後先考えずに何でも口走ってしまう。マセルはいつも落ち着いていて、芯が通っていて、動じない、強い男だった」

「リギルさんよ。あんたはマセルさんじゃない」

ナトカはまじめな表情で答えた。

「それにだ。あんたの旅はまだ始まったばかりなんだろう？ 天国は、あんたが思っているよりずっと広いぜ。詳しい事情は知らんが、少なくともあんたはまだこの世界のごく一部しか知らない。たとえば、だ……」

ナトカはやおら席を立つと奥から大きな布のようなものを持ち出してきて、何度が両手で振って卓の脇の床に広げ、その端に胡坐をかいて座った。その布は一辺が人の身長ほどもある大きなもので、古びているが刺繍によって何かの模様が描かれているように見えた。

「いいか？ 今ここだ」

ナトカは布の下の方から伸びている線を指して言った。それでリギルは、この布に描かれたのが地図だと分かった。リギルも床に胡坐をかいて、それをまじまじと見た。

「お前がいた町は、この図よりもっと下だ。そして、ここで街道が十字に交差していて、ここからもっと上に行くと、色欲の町だ。言っとくが、色欲の町は、天世界の中では決して大きい町ではないぞ。そして、それよりもっと上に行けば氷原がある」

「氷原？」

「そうだ。都市群はたいがい氷原を中心に円を描くように作られて

いる。何をするにも、天氷がなくちゃ始まらねえからな」

「天氷？」

「……あんた天氷も知らないのか？ 天氷ってのは、つまりまあ、この世界にあるすべての物の素だよ」

リギルはきよんとしていた。

「俺の庭に木があっただろ？ あれは俺が自分で天氷を運んできて作ったんだ。それだけじゃない。今飲んだ酒も、食料も、家も、なんだって、もともと全部天氷だ」

そう言えば街道沿いには樹木どころか雑草すらただのひとつも生えてはいなかった。町の中は所々に街路樹や林があったと思うが、あれはみんな人が拵えたものなのか、とりギルは何となく納得した。

「話が逸れたな……とにかく、だ。この世界には至る所に天氷が湧き出るでっかい湖みたいな場所があって、その周りに町ができる」

ナトカは、布の中央にでかかと描かれた大きな氷原をコツコツと拳で叩いた。それから、その周囲に規則正しく並んだ、それぞれの都市を表す4つの図柄を順に指差して教えた。

「まず技巧殿の町、上にあるのが知の殿の町、次が物欲の町、そして下が色欲の町……そして、それぞれの町の周囲にはさらに、あんたがいたような郊外の集落が点在している。この全部で一つの『都市群』だな」

「それで、俺が知っているだけでも都市群は10以上ある。というより、この世界全部でいくつあるか分からん。とにかく、天の世界は想像以上に広い」

「ん？ ああ」

リギルは地図をまじまじと見つめながら曖昧な返事をした。女がまた酒と肴を運んできてくれた。いつの間にか床に胡坐で話し込んでいたリギルとナトカは、ふと立ち上がって席に戻った。

「ええっと何の話だったか……ああ、で俺が言いたかったのはな。要するにあんたは、天国にいる連中がみんな色欲に溺れているように見えるのが気に入らないんだろ？ でもな、それは、あんたが目を覚ました場所がたまたま色欲の町に近かったってだけだぜ？」

女は何も言わず静かにその地図を畳んで奥に消えた。

「まあ、さっきまであいつと楽しんでた俺がいうのも何だがな。考えてみりゃ、たとえばの話、そもそも色欲なんてもんはそんなに程度のいい欲求じゃないだろ？ 俺たち人間にとって一番大事なのは性とか食とかいう程度のもんじゃないと思うぜ？ そりゃある意味じゃ大事なもんだけだよ、まあ俺に言わせりゃこうだ。本能的なもんが本質的ってことにはならねえってことだ。違うかい？ リギルさん」

「要するに俺が言いたいののは、男と女の関係なんてもんは、言ってみりゃ取るに足らねえもんだってことだ。深遠でも神聖でもねえ。然るに、否定するもんでも咎めるもんでもねえ、つまりは、たいした問題じゃねえ」

ここまで言って、ナトカは杯に残った酒を一気に飲み干した。リギルはナトカの押し付けるような物言いに辟易しながらも、言わんとすることは何となく理があるように感じた。

リギルは最初、クセルたちが現世で守ってきた倫理や道徳をあつさりと捨て、己の生理的欲求を満たすことに明け暮れ、際限なく快楽のみを高めることに執心しているように思っただけだ。しかし、

それは事の表面だけを見た印象に過ぎないかもしれない。あるいはそれは天における生き様の一つなのかもしれないが、少なくともそれは唯一ではない。別に全員がそれを強要されているというわけでもないのである。

「好きにすればいい……か？」

「そもそもクルは何も制限なんかしちゃいない。それに、本当にまじいことならとくに調整されてるはずだ。なんの咎めもなく許されているということはだな、それは、良いとか悪いとかいう前に、そもそもたいした問題じゃないってことだ」

リギルはイラのことを少し思い出した。リギルの腑に落ちない様子を見て、ナトカは？ 気を隠そうともせず話し続けた。

「どうして、現世の人間は色欲を特別扱いするか分かるか？　ありやあな、俺が思うにあれば、いろんなものをくっ付けてるからだ。現世で言うところの色欲って奴は、考えてみるとすごいねじ曲がったもんだぜ？　ありや本能でもなんでもない」

「考えてもみろ、俺たち男がもともと持ってる性欲なんて、あきれるほど単純なもんだろ？　なのみんなで寄ってたかって、それに愛だの罪だのって、後からくっ付けてるだけだ。ありや、つまり味付けだ。もともと素っ気ないもんを、みんなで味付けして有難がつてるだけなんだ。まあ、それだって俺に言わせりゃたいした問題じゃないがな」

「色欲に溺れている連中を傍から見りゃあ、そりゃ低俗に見える。要するに幼稚なのさ。そりゃそうだろう。でもな、それを非難する必要も、そんな連中を諭す必要もないんだ。時間は無限にあるんだから。そういう連中は、まだ現世で教え込まれたことから抜け切っ

ていないだけなんだから。あんまり我慢してたんで、色欲というのが化けもんみたいに膨れ上がってるだけなんだ。あんなもんはそのうち自然に収まる……リギルさん。あんただってそうだ。変に考えるからおかしくなるんだぜ？　好きにすりゃいいんだ」

リギルは反論する気にもなれなかった。と言うより、ナトカの論にどう反応していいか分からなかった。

「さーて。俺はちょっと眠くなったから先に寝かせてもらおう。あんなも、急ぐ旅じゃないんだったら、少しゆっくりして行けって」

そう言うとナトカは勝手に奥へ引っ込んでしまった。リギルは半ば呆然としていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2642t/>

天国のマセル

2012年1月10日21時48分発行